

平成19年度 オーラル・ヒストリーの 記録に基づく災害時対応 の教訓の活用化報告書

特 別 研 究

オーラル・ヒストリーの記録に基づく災害時対応の教訓の活用化 報告書

目 次

はじめに 研究の目的

第1章 「行政関係者に対する震災当日の事象と対応状況についてのインタビュー（五百旗頭真チーム）」が得た教訓

第1節 リーダーたちの事態認識	4
第2節 現場の救出活動	7
第3節 市民と行政	8

第2章 「震災復興に従事したオピニオンリーダー、行政関係者、地元支店長等と研究メンバーによるグループディスカッション（林春男チーム）」が得た教訓

第1節 林チームの概要	10
第2節 分析の手法	11
第3節 災害対応従事者とオーラル・ヒストリー	13
第4節 教訓の連鎖	14

第3章 「阪神・淡路大震災犠牲者聞き語り調査（室崎益輝チーム）」が得た教訓

第1節 聞き語り調査の目的	16
第2節 聞き語り調査の進行	19
第3節 聞き語り調査の研究成果	20
第4節 聞き語り調査の今後の課題と展望	22

おわりに まとめと提言

第1節 研究成果	24
第2節 政策提言	26
第3節 今後の展望	27

資料編

オーラル・ヒストリー要約 谷川三郎・元芦屋市建設部長	29
五百旗頭チーム オーラルヒストリー 谷川三郎・元芦屋市建設部長	30

はじめに 研究の目的

阪神・淡路大震災オーラル・ヒストリーは、当機構の前身たる阪神・淡路大震災記念協会によって、震災から3年後の1998年に始められた。戦後日本社会は、冷戦という安定二極秩序の時代を享受してきたが、国内においても、大きな地震の発生にも見舞われてこなかった。しかし、冷戦の終結と軌を一にして、地震もまた活性期に入った。その号砲となったのが、1995年、大都市を直撃した阪神・淡路大震災であった。

その地にいた我々は震災体験の記録を永遠に残す必要を痛感した。阪神・淡路大震災を分析したり、教訓を引き出したりすることは重要である。しかし、まず何が起こったかという事実を永遠に記録するのが責務ではないかと考え、震災の体験者、当事者に広範にオーラル・ヒストリーで話を聞くというプロジェクトを立ち上げたのである。

当プロジェクトは3つのチームから構成されている。まず、五百旗頭真防衛大学校長（当時、神戸大学大学院法学研究科教授）を中心とする「行政関係者に対する震災当日の事象と対応状況についてのインタビュー」（以下、五百旗頭チームと略記）である。これは、阪神・淡路大震災が起こったときに、市民を守るべき立場にある行政は、何を考え、何をしたのか。とくに、1995年1月17日5時46分の瞬間何をしたのか。その日、何をしたのか。せいぜいその週ぐらいで行政は何をやったかということを探ることを目的とする。実績は20件である。

二つ目のグループは、林春男・京都大学防災研究所 巨大災害研究センター教授（当時、京都大学防災研究所教授）を中心とする「生活回復過程研究調査（震災復興従事者調査・中央区プロジェクト）」（以下、林チームと略記）である。五百旗頭チームが1月17日当日を中心にインタビューを行うのに対して、林チームはその日を起点にして、復興過程全般を広範にインタビューするものである。実績は、42件である。

第三に、室崎益輝・関西学院大学総合政策学部教授（当時、神戸大学工学部教授）を中心とする「阪神・淡路大震災聞き語り調査」（室崎チーム）である。室崎チームは、6,434人といわれる犠牲者の家族や身近におられた方にインタビューするものである。実績は、353人の犠牲者の記録（291人へのインタビュー）となっている。それは犠牲者数全体の10%には至っていないが、社会科学の調査としては、低くない比率である。

以上、阪神・淡路大震災の体験を永遠に記録に残すというオーラル・ヒストリーであるが、しかし、記録を残すことをもって満足してはならないであろう。次に、大事なことは、残した記録を分析し、何を見出し、どういう知見を得るのかということである。今後は、可能な限り意味を引き出していくという段階に入らなければならないというのが本研究会の趣旨である。

もちろん、オーラル・ヒストリーの記録は広範であり、すべての教訓をすぐに汲み出すことは不可能である。また、現段階で、記録の全てを公開するわけにもいかない。インタビューを受けた人物のプライバシーの問題や公開の了解の問題があるため、最終的には30年経たなければ全てを公開することはできない。

しかし、「誰がどう言った」ということを直接に公表するには一定の慎重な扱いが必要であるが、その分析は、オーラル・ヒストリー事業に内側から関与した研究者がまず担う

べきことではないかと思われる。

そこで、平成19年度は、それぞれのチームのインタビューアーが、オーラル・ヒストリー記録から得た知見を分析し、そこから汲み取られた教訓を4回にわたる研究会（「オーラル・ヒストリー記録に基づく災害時対応の教訓の活性化」研究会）において報告した。つまり、30年非公開のオーラル・ヒストリー記録を今すぐに公開することができないため、それを咀嚼して得た知見を公共の財産とする試みである。本報告書は、これらの研究会での報告をとりまとめたものである。

なお、本報告書は、参考資料として、五百旗頭真チームが行ったオーラル・ヒストリーとその要約の一部を資料編として添付している。通常、オーラル・ヒストリーは、30年非公開であるが、インタビュー対象者の谷川三郎・元芦屋市建設部長の許可を得て、ここに特別に掲載するものである。

第一章「行政関係者に対する震災当日の事象と対応状況についてのインタビュー（五百旗頭真チーム）」が得た教訓

【研究会報告者】 五百旗頭 真 機構副理事長兼研究調査本部長／防衛大学校長

京都大学大学院修士課程修了。広島大学助教授、神戸大学教授を経て、現職。博士（法学）。専門は日本政治外交史、日米関係史。ハーバード大学客員研究員、日本政治学会理事長のほか、小渕内閣の「21世紀日本の構想」懇談会では外交分科会（第1分科会）座長を務め、現在は福田内閣の「外交政策勉強会」座長。オーラル・ヒストリー事業には、（財）阪神・淡路大震災記念協会が当事業を開始した1998年当初より参画。

第一節 リーダーたちの事態認識

五百旗頭チームは、阪神・淡路大震災が発生した1月17日の当日の行政の対応について、兵庫県知事や被災地の地方自治体の首長や責任者、そして、第一線部隊である消防、警察、自衛隊等で救援活動に当たった幹部らにインタビューを行ってきた。震災という奇襲攻撃を受けた危機的な事態における対応の多くは、悲惨なものであった。とりわけ、情報システムの倒壊の結果、彼らが突発した大災害について全体的な事態認識を持てなかったことが悲惨であった。

まず、事態認識を持たなければ対応はあり得ない。阪神・淡路大震災発生直後は、通信手段を奪われ、情報を入手し対応するための機構そのものが壊滅した。そのため、常軌を逸した惨状が起こっているようだが、その全貌は分かりようもないという状況にあった。テレビを見た方が事態を把握できたかもしれない。通常のように、警察が確認した死者数を積み上げるというやり方では、初動において災害の全体を把握することはできない。しかし、ある程度までの現場を洞察力をもって見れば、実証的な手法ではなくとも、相当全貌に近いものを想定できたかもしれない。

兵庫県の場合、衛星システムを完備していたが、冷却水のタンクが壊れたために冷却ができず、衛星を通じての情報システムが機能しなかった。貝原俊民兵庫県知事は、責任者である自分が行方不明になることが一番困る事態であり、官舎にいる限り必ず誰かが連絡をしてくるという認識を持ち、迎えを待った。

他方、岡本のマンションに住んでいた芦尾長司・副知事は、たまたま階下に住んでいた娘婿の運転により、まだ暗くて通勤路が混み合う前に県庁に到着した。そこで、芦尾副知事が懸命に知事に連絡をとり、その結果、知事は8時20分に県庁に到着した。だが、自衛隊に災害派遣を要請するのであれば、どこの地域にどれだけのどういう装備を持ってきてくれということを伝えなければならない。しかし、何ができるというのか。職員の多くが被災して出勤できず、外部との連絡もままならない。県下で何が起きているかも掌握できない。

兵庫県知事に比較すれば、笹山幸俊・神戸市長は幸運であった。六甲近辺の自宅で服を着替えていたら、近所に住んでいた山下彰啓・調整局長が車で迎えにきてくれたのである。しかも、車中から43号線が倒壊している様子などを見て周りながら市役所に入っ

たのであった。したがって、被害の少ない山の手を通り県庁に入った兵庫県知事と比較して、神戸市長はより厳しい事態認識を持つことができた。加えて、神戸市長は建築技術者出身でかなりの建造物への洞察力に恵まれていた。山下調整局長へのインタビューによれば、市長はさすがプロだから、遠方からビルを眺めて、「あのビルはもう終わりや」とか何とかおっしゃる。そして、車で近づくと実際にそのビルが大きなダメージを受けていたという。つまり、神戸市長はより厳しい認識を持って市役所に入ったのであった。しかし、それでも、対応はうまくいかなかった。神戸市全体の状況は判らないし、職員で無事出勤できた人は限られている。何ができるのか。

このように、被災自治体が厳しい事態に追い込まれた中で、例外的に、的確な事態認識を早くに持つことができたのは後藤太郎・芦屋市助役であった。後藤氏は、芦屋市岩園の丘の上に住んでいたが、地震で起こされた途端に、これは相当なことになると直感し、市役所に向かうことにした。しかし、交通手段がないため、道に放置された自転車を使うことにしたが、その日に限って全て鍵がかかっており使用できない。そこで、後藤氏は仕方なく走って市役所へ行った。その途中、倒壊した家に生き埋めになった人を救出する場面などを目撃し、ますますこれは重大な事態だという認識を持った。後藤氏は、市役所に到着した途端に、先に到着していた2人の職員のうちの1人には、100人ぐらいの遺体を世話してもらうためにお寺に挨拶に行くよう指示を出し、もう1人には、医師会の会長のところに行き、多くのけが人の治療に全面協力を依頼するように指示した。そして、自らは、何度も電話をかけ、棺桶屋さんに100個の棺桶を注文したのであった。阪神・淡路大震災が発生した瞬間に、こうした行動をとりえた市長はどこにもいない。芦屋の場合、北村春江市長は夫が腰の骨を折って病院へ連れて行かなければならなかったため不在であったが、助役が機敏に行動したのであった。助役による「芦屋市に100人ほど犠牲者が出る」という見当は完全に間違っており、実際は、400人あまりに犠牲者となった。ところが、自分で100人という仮説を早々に出したがゆえに、昼には400人という数字を当てたのであった。

芦屋市は規模が小さいから割り出しやすいということもある。しかし、兵庫県では、知事や幹部は、6,000人とまではいかなくても1,000人の犠牲は出るという仮説を出して行動することすらできなかったのである。なぜ、芦屋市の助役だけが、このような洞察力を持ちえたのか。オーラル・ヒストリーによれば、後藤氏は、文書ワーク中心の事務官ではなく、現場での経験が豊富なたたき上げ肌であった。例えば、風水害の下水処理課等において、「こういう雨がどこに降ったらどこに難しいボトルネックがあってここが洪水を起こしそうだ」などと、いつも現場を見て考えていたと言う。このように、後藤氏は、現場主義で考え対応するということを訓練してきたために、地震が起こった途端に、この地に「何が起こるか」ということに頭を働かせて対応することができた。芦屋市はそういう意味で例外的だったのである。

自衛隊の場合、オーラル・ヒストリーによれば、松島悠佐・中部方面総監は、指揮官らしく、事態認識を試みた。自衛隊は早朝、松島総監は、八尾からヘリコプターを飛ばしたが当時のビデオは性能が悪く、2階の屋根が映っているが、1階がつぶれていることは分らなかった。何が写っているのか鮮明ではなかった。しかし、煙が上がっていることや、

43号線の高速道路が倒壊しているということは分かった。松島総監は、容易ならぬ被害は認められる。しかし、被害地域は意外に限定されており、せいぜい西宮から長田・兵庫まで、あとは淡路島の一部らしいと判断した。松島総監は、このように、被害地域が意外に限定されているので、とりあえず第3師団の出動で足りるだろうと考えたのである。この地域は、5,000人ぐらいまでの動員力を持っている第3師団の管轄地域であった。それで対応できると思ったのである。その結果、既に動き始めていた姫路の第3特科連隊と伊丹の36連隊の行動は追認しつつも、他の部隊に対しては、準備するように指示するに止めたのであった。後知恵によれば、地域が限定されているという判断は正しかったが、その地域における被害の深さが読めなかったのである。このように初動における事態認識を間違った松島総監であったが、その日の夜には、被害の深刻さに気づいた。そこで、松島総監は、第3師団だけではなく、自分が統括する、名古屋の第10師団、広島第13師団、そして、善通寺の第4師団の全部に対して出動命令を発したのである。だが、それから準備をしても翌日のうちに現地には到着しない。もう一度、夜を越えないと交通渋滞のために現地に入れなかったのであった。こうして、松島総監は、いにしえより有名な、兵力の逐次投入という事態にはまったのである。松島総監が、当初から事態の重大性を認識して、総動員をかけていれば、2日目には統括する師団の全てが現地に入れたはずである。ところが、初日は、姫路の第3特化連隊が神戸市に、そして伊丹の36連隊が芦屋、西宮に、それぞれ200名ほど入った程度であった。しかも、そのほとんどが午後にならないと到着しなかったため、自衛隊は、生存救出にはほとんど役に立たないという結果に終わった。いかに初期の事態認識が難しいか、そして、重要であるかということが理解されよう。

事態認識の甘さという点においては、村山富一・首相も劣らない。村山首相は、朝、テレビを見ているときは、重大かもしれないと思っていたが、その後、警察の遺体確認発表方式（22名）を根拠に限定的な災害だと判断したのであった。村山首相は、午前10時に「21世紀地球環境懇話会」に入った。重大な問題があるという自覚があったら、冒頭のあいさつだけをして退席するのであろうが、そのまま出席し続けたのである。そして、引き続き「月例経済報告関係閣僚会議」にも出席した。午前中、その1時間ずつの2つの会議に居座ってしまった。その結果、テレビを見ている一般国民よりも、村山首相の認識が甘かった。彼は、お昼になって、死者が三けただということを聞いて、「えっ」と驚いたという。首相も事態認識が不十分であった。

東京の政府には格別の情報がなかったのであるが、防衛庁では、自衛隊の出動をめぐる論争があった。当時、村田直昭・防衛局長の下には、守屋武昌・防衛政策課長（後に事務次官）がいた。テレビを見て事態が重大だと判断した守屋課長は、知事の要請があるとかないとか言っていないで、こちらの方から自衛隊の出動を命じるべきだということを村田局長に提言した。これに対して、山崎信三郎・運用課長は、テレビを見たくらいの不確かな根拠で軽率なことはできないと反論したという。「軍が動き過ぎる」、「危険な軍事化につながる」と絶えず批判される戦後平和主義を前提とした山崎課長の反論であったと考えられる。村田局長は、守屋・山崎の真ん中をとって、それではいつでも出動できるよう準備をしておくようにと裁定したという。

以上のように、洞察力のある人は、テレビの情報だけであっても、事態の重大性がおおよそ分かった。しかし、彼らは少数であって、政府は、それ以上の行動をなかなか起こせない。なぜなら、社会は、警察が発表した確認された遺体の数を根拠としたからであった。もし、警察発表方式で言えば、広島に原爆が落ちた日、日本では死者ゼロと言わねばならない。警察が遺体を確認して東京に告げなければ、死者はいないわけである。壊滅的な悲劇の中で死体確認数を確かな根拠とするなら、「被害ゼロ」ということになるのである。危機の中では、芦屋市の助役が持った想像力を働かせて、概数を考えるということをしなければならないのである。

第二節 現場の救出作業

仮に正しい事態認識を持ったとしても、二つの問題があった。第一の問題は、救出作業のためのツールである。重大な壊滅的な事態が起こったとき、自治体は市民を救う手段を自らは持っていない。地震発生直後に3,000人の職員がそろえば、全員に例外的な指示を出すことも出来よう。しかし、当日は、県職員もまた被災者であり、出勤したのは300人程度である。これは、重大事態に対する戦力にならないばかりか、必要な通常業務をこなすにも足りない人数であった。重要な役割を果たしたのは、第一線部隊である警察、消防、自衛隊であった。

第二に、そもそも情報を発信する手段を持たなかったことである。ここで不思議なことは、兵庫県知事が、現場の警察機構と消防機構のシステム（無線等）を活用することができなかったことである。消防は市の管轄下にあるため、兵庫県は、県警察を自分の方へ引き寄せて自分のツールにしてよかったと思われる。けれども、県警と県庁の関係がよくなかったようである。この点で、滝藤浩二・兵庫県警本部長は「自分は3度も午前中知事のところへ行っただけでも会えなかった」と言っている。それに対して、知事は、一度、「警察と連絡がつかんなら走っていけ」と部下を怒鳴りつけて生田警察へ行かせことがあったと言う。いずれにせよ、県庁と県警は、恒常的に連絡を取り合うことをしてこなかったのである。このように、情報を集めるという面での情報不全だけではなく、知事として国あるいは関係機関に発信するという面での情報不全のどちらも超えられなかったのである。その結果、事態認識がたとえあったとしても身動きができないのであった。

神戸地震以後の変化についていえば、自衛隊には初動体制にかなりの進展が見られる。例えば、従来、防衛大学校の学生2,000人は、地震が起こったとしても、救出活動ができなかった。なぜなら、防衛大学校の学生は教育訓練中であり、災害救出の任務がないからである。したがって、防衛大学校長が学生に出動命令を下すことは、むしろ法規違反なのであった。しかし、将来、幹部自衛官になって国民を救う任務がある学生たちが、教育訓練中と称して救出活動をしなくてもよいものであろうか。このような防衛大学校長の問いに対して、学生は、「そんなときに動かない防大生や自衛隊ならこんなところにいる」という反応であった。防衛大学校長は教育訓練上の命令なら下すことができる。幹部自衛官になるため防大において教育訓練中に、大地震という不幸な事態に見舞われた。幹部自衛官は将来、災害救助を行うから、災害の現場を観察しておくことも教育上必要である。

加えて、どうすれば救出できるかということを実際にやってみるのは、訓練上意味がある—という訳である。そして、2007年9月1日には防衛大学校はかなり本格的な災害訓練を実施したのである。

また、柏崎沖地震の現場を観察したときも、自衛隊の初動体制がかなり変化したことを実感した。第一に、事態認識のスピードが速くなり、地震が発生すると、陸・海・空それぞれの自衛隊のヘリコプターと飛行機が直ちに派遣される。阪神・淡路大震災の際には、自主派遣では300メートル以上の高さを飛行しなければならなかったのであるが、現在では、偵察調査のためであれば300メートル以下を飛行することも可能であり、高性能カメラで被災地を映し出す。さらに、その映像は、方面総監司令部と市ヶ谷の中央指揮所、そして首相官邸に転送されることとなっている。その結果、地震発生後、2、3時間のうちには事態状況全体が把握できるようになったのである。

第二に、各連隊では、30人の小隊を常時待機させる態勢をとり、それらが地震発生後、即、出動可能となっている。全国のすべての連隊がそうしているので、統合幕僚長は必要と思われる数の小隊を初動において先遣隊として派遣し、その報告に基づいて全国のどれほどの部隊を投入するか判断できる（2005年の統合運用方式への変更により、防衛大臣は統合幕僚長を通じて陸海空すべての部隊を直接指揮するようになった）。その結果、最近では、事態認識と出動の両局面において、自衛隊は、阪神・淡路大震災のときとは著しく異なってきている。

第三節 市民と行政

だが、神戸地震の救助活動において最も顕著な新現象は、ボランティアに示される市民の活動であった。救助活動の訓練も受けていない市民に、社会は支えられたのである。兵庫県や行政が市民にお願いをしたのではなく、市民が自発的に救助活動を行ったのであった。行政には、「来たものは使わざるを得ない」とボランティアを迷惑にすら思っていた面もあったが、やがては、ボランティアなしには避難所も運営できないことが至る所で明らかとなっていく。さらに重要であったのは、警察・消防・自衛隊によって救助された人々の数倍の人々が、家族や近所の市民に救われたことである。

ここで興味深いのが、西宮市の山田知・西宮市教育長（インタビュー時は西宮市長）のオーラル・ヒストリーである。山田氏は、遠方に住んでいたため到着が昼間となった市長に代わって、市役所で救助活動の指揮をとったのであった。山田氏によれば、西宮市内でも、生き埋めになった人をかなり多く救助できた地域と、そうでない地域に非常にバラツキが見られたという。そこで、その地域の差が何によるかを尋ねた。山田氏によれば、それは、「その地区に祭りがあるかどうか」であるという。祭りがあると、市民が小学校や公民館に集まることによって、絶えずコミュニケーションが保たれる。その結果、市民は、近隣の人々の所在などを親しく知ることになる。そういう地域では、災害が起こった場合にも、効率よく人々が救助できるというわけである。他方、都市では、人に煩わされずに自由に生きる喜びを感じ、「隣は何をする人ぞ」とやっていた人は、自分が生き埋めになったときには、やはり、「隣は何をする人ぞ」で近隣の誰もが気にしてくれないとい

う結果となったのであった。

ボランティア130万人という数字が示すように、救援活動において社会現象として非常に大きな意味を持った市民の行動であったが、交通規制の壁を乗り越えるには至らなかった。警察は、交通規制については、市民の協力を得ることができなかった。欧米では、警察の手がまわらなくなる事態において、交通規制について市民の協力を得ることが常識となっている。大規模災害が起こったとき、警察が人手不足になるのは当然であり、そのときに市民が公共心から交通整理を行うのは当然のこととみなされているのである。他方、日本では、権限のない、当局ではない市民が交通整理を行うことに対しては、警察には違和感があり、市民もあまり考えたことがなかった。しかし、官が公共性を独占するのではなく、災害時においては、積極的に市民の協力を求める必要があろう。行政が求めさえすれば、成熟してきている日本の市民社会である。交通規制への協力を行うことも可能である。だが、インタビューを通じて、行政の認識がそこまでには至っていないということを感じたのであった。

第二章 「震災復興に従事したオピニオンリーダー、行政関係者、地元支店長等と研究メンバーによるグループディスカッション（林春男チーム）」が得た教訓

【研究会報告者】 田中聡 富士常葉大学大学院 環境防災研究科・准教授

早稲田大学大学院理工学研究科博士課程修了（博士（工学））。1995年～2004年まで京都大学防災研究所助手を務めた後、2004年4月から現職。専門は耐震工学・都市防災。オーラル・ヒストリー事業には、（財）阪神・淡路大震災記念協会が当事業を開始した1998年当初より参画。ほぼ全ての聞き取り調査に参加した。

第一節 林チームの概要

林チームは、2つのプロジェクトを並行的に実施してきた。第一に、西宮プロジェクト（後に、「長田プロジェクト」・「西宮プロジェクト」・「住宅再建プロセス」・「マスコミ体験事例」・「復興まちづくり」に発展）と呼ばれる調査である。阪神・淡路大震災が起きた1995年から京都大学防災研究所の林春男教授を中心にチームが生まれ、西宮を舞台にしたオーラル・ヒストリー調査が開始された。当プロジェクトは、西宮市役所を中心に様々な災害対応をした方々へのインタビューと、西宮市を3つの地区に分け（高松町・上ヶ原・今津水波）、そこにおける特徴的な被災者数名へのインタビューを重ねたものである。

林チームの第二のプロジェクトは、中央区プロジェクトと呼ばれる調査である。当プロジェクトは、8年間で41名へのインタビューを実施した。当初、インタビューの舞台を西宮に設定した背景には、西宮市自体が大きな被害を受けていたという理由と同時に、西宮市の規模がわが国の平均的な都市の規模であり、今後のわが国の防災を考える上で基本的なサイズであると判断したためであった。

次に、西宮プロジェクトを開始した後に、行政や様々な企業のヘッドクォーターが所在する神戸市中央区を中心に、震災時に重要な意思決定をする役割を担った各組織のトップへのインタビューをも開始したのであった。とりわけ、当初、業務発注先であった東京海上火災の元神戸支店長の厚意により、そのライオンズクラブにおけるコネクションを用いて、被災地域の様々な企業のトップにインタビューを行うことが可能となったことは幸いであった。

そして、神戸市中央区を中心とした20数名の被災地のトップたちへのインタビューが実現した結果、平成14年からは、視点を転じて、霞ヶ関の政府首脳や官僚たち（村山富一・元総理、後藤田正晴・元副総理など）へのインタビューを開始した。その後、平成18年度からは、五百旗頭チームと重複するケースもあるが、スコープを復興まで含めて、被災10市10町の首長へのインタビューを行った。なお、このように、基本的には災害対応のキーパーソンを選んでインタビューを行う中央区プロジェクトは、オーラル・ヒストリーという分野においては、御厨貴・東京大学先端科学技術研究センター教授が行っている歴史の

1 御厨貴『オーラル・ヒストリー』（中央公論新社、2002年）を参照。

キーパーソンに対してインタビューを行う形式に、考え方としては比較的近いといっている¹。

両プロジェクトともに、インタビューは、1回につき3時間程度であり、年間を通じて5件程度を目標としてきた。インタビューの蓄積と平行して、インタビューの方法についても、メンバーと議論したり、それ以前のプロジェクトと比較したりしながら、最も効果的な手法を模索した。その結果、基本的には全てのインタビューにおいて、インタビュー対象者に時系列に沿ってとにかく話してもらうという手法を共通して実施した。この手法に基づくインタビュー記録は、対象者の印象に残っているところは内容も濃い、余り残っていないところは内容が薄い。また、記憶が飛ぶこともあるし、昔の話に遡ったかと思うと、突然、今の話になることもある。したがって、当初は、インタビュー対象者の持つ情報を100%聞き取ることができないことに危惧を覚えたこともあった。

だが、インタビュー記録に、個人的な思い入れのグラデーションがあるということは、裏返せば、それ自体がインタビュー対象者の話のポイントを示し示すことをも意味する。そうしたグラデーションの中から話のポイントを見極め、さらにそれを基点に話を展開していくと、インタビュー対象者が特に話したいことが如実に浮かび上がるのである。それはインタビュー対象者のポイントの一面かもしれない。しかし、例えばそれが一面であっても、インタビューのポイントを定義できた意味は大きいといえよう。インタビューアーは、阪神・淡路大震災において何が起きたのかという全体像は見えていないし、ましてや、何がインタビュー対象者にとって重要だったのかも分からない。したがって、実態に即した重要なポイントをインタビュー対象者から引き出すには、あらかじめインタビューアーが用意したポイントを質問していくよりは、インタビュー対象者が出してくる話をそのまま引き受けていく方が効果的なのであった。

もっとも、インタビュー記録そのものは、一応時間に沿った内容となってはいるものの、話が前後したりある話題が突然消えたり現れたりするものであり、決して読みやすいものではない。そこで、林チームは、一回一回のインタビュー記録を、時間の順序をきちんとそろえてみたり、あるいは話題が飛び飛びになってしまうものを一つにまとめたりして、内容に整合性をとるべく編集している。もちろん、内容自体に関しては手を加えていない。このような編集作業を経た記録は、普通のインタビューと比べて読みやすいものとなっている。

第二節 分析の手法

現在、当プロジェクトとは別に、阪神・淡路大震災以降、続発する地震災害被災地においても、災害対応従事者を対象にインタビューを行っている。例えば、新潟県中越地震では小千谷市役所において様々な支援活動を実施したが、その過程で、建築物の被害認定に対して市役所がどのように対応したかという問題に関してインタビューを重ねた。さらには、そうしたインタビューをさらに拡大し、被災者支援等、その他の市役所の業務についてのインタビューを蓄積しつつある。これらの記録から、市役所の災害対応がどのように進み、そこにどのような問題があり、そして、いかに改善されるべきかという研究を実施

している。こうした研究は、まさに当プロジェクトが嚆矢となって、その後が続いてきているものである。

では、こうして収集されたインタビューをどのように分析するのか。林チームはインタビュー記録の収集と同時に、インタビュー記録を分析する手法に関しても試行錯誤を行ってきた²。ここでは、その一端を紹介したい。分析にあたり参照したのは、文化人類学における民族誌の分析手法であった。文化人類学では、調査地における記録を民族誌（エスノグラフィー）の形で発表する。さらに文化人類学では、そうした記録が単に蓄積されるだけでなく、それをレファレンスとして使いやすいうように、あるいはあるテーマに沿って検索しやすいように区分する努力が積み重ねられてきた。その結果、文化人類学では、人類文化のあらゆる側面を要素化したコードを開発し、民族誌のテキストにこのコードを付与したシステムを構築した。このコードは文化項目分類(OCM: Outline of Cultural Materials)と呼ばれるものであり、システムは人間関係地域ファイル(Human Relations Area Files: HRAF)と呼ばれ、米国エール大学の外郭団体であるHRAF協会が管理している。以前は紙カードで管理されており、全世界で数十セットしか存在しなかったが、現在では電子化が進められているようである。

そこで、当プロジェクトのインタビュー記録を分析するにあたり、こうした文化人類学におけるコード分類を援用しようと考えた。オーラル・ヒストリー記録の中でも、キーパーソンに対するインタビューは話題も特定化されるが、一般市民の方々に対するインタビューは被災後の生活再建全般にわたって広範な内容が語られている。このように、住まいや食事をどのように確保していったのか(つまり「生きていく」ということ全般)に関して語られている記録については、上記のコード体系を使って、分類まではいかずともコード化はできるのではないかと考えたのである。

そこで、初期に収集したインタビュー記録については、各パラグラフについてその内容を付し、コード化を試みた。ただし、震災に特化したインタビューでは、従来のコードがそのまま上手く当てはまらないこともあった。だが、限界はあるものの、この手法によって基本的なレファレンスは可能となると思われる。特に、コード化しておけば、インタビュー記録が膨大に蓄積された後に、それを検索することが可能になると考え、こうした作業を進めたのであった。そこで、被災体験から復興過程に至る日常体験がバラエティー豊かに語られている西宮市プロジェクトのインタビュー記録の全て（32ケース）に対して、コード化によって分類を試み、さらに分析を加えたのであった。

また、中央区プロジェクトが収集したキーパーソンのインタビュー記録も、ある程度トピックは決まってはいるものの、少なくともある一人の人物から見た体験であり、震災経験の様々な断片の一つと考えることも可能である。したがって、同一地区に住む様々な人々の話を収集し、それを上手にまとめ上げることができれば、その地域の全体像を描くことも可能である。つまり、個々のインタビュー記録には欠けている部分もあるが、それ

² 以下の記述は、田中聡、林春男、重川希志依、浦田康幸、亀田弘行「災害エスノグラフィーの標準化作業手法の開発—インタビュー・ケースの編集・コード化・災害過程の同定—」『地域安全学会論文集』No.2、2000年11月を参照。

らを組み合わせることで相互に補完することが可能なのである。

そこで、インタビュー記録に、この分類項目を振っていき、後でもう一回それを全部足し合わせるという作業を試みた。具体的には、インタビュー記録を時間と教訓の二つの側面から分類した。時間の側面では、大別すると、10時間、100時間、2～3日、一月（1000時間）、そして、それ以降というように分類した。そして、時間に関係のない様々な教訓をそれが出てくる順序や回数によって分類した。さらに、これらの分類を重ね合わせることで、それぞれの時間帯でどういう教訓が表出するかということを上位から順序づけて寄せ集めて表にまとめた。この表からは、最初の10時間、100時間（2～3日の間）そして、1ヶ月後のそれぞれの時間帯で共通して持ち上がる話題やトピックが明らかとなる。こうした表の結果から何が明らかとなるのであろうか。例えば、西宮市プロジェクトのインタビュー記録を分類・分析した結果、高松町における災害過程が明らかとなった。地震発生後、10時間以内では、地震の揺れに驚いて怪我をしたというような話や、あるいは、救助活動をするけれども亡くなられた人が多く出てくるといった話が多い。そして、発生後、2～3日では、コミュニケーションやコミュニティーという問題に関する話題が出てくる。その後1ヵ月の間には、日常生活に関わる水、トイレ、風呂といった話題が多い。それ以降となると、住まいの再建の話題になってくる。このように、インタビュー記録を分類することによって、災害過程の全容が実証的にかなり明らかとなる。

このような研究にどこまで意味があるかという問題は別途検討しなければならないが、少なくとも、収集したインタビュー記録の活用を考える場合には、その検索方法を考えておかなければならない。現在は、文字検索はかなり自由に行えるようにはなっているが、文字検索によって果たして災害過程の全容が読み取れるのか、あるいは、後世に資料としてうまく使用されるのかという疑問は残る。その点で、先に述べたようなコード化作業によって、少なくともパラグラフ単位で、それぞれの内容を示す指標があれば、後世の使用に役立つであろう。

第三節 災害対応従事者とオーラル・ヒストリー

中央区プロジェクトでは、防災の専門家ではないが、組織のトップとして意思決定を下さなければならなかった人々へのインタビューを行った。その中からは、危機を乗り越えた組織には、キーポイントとなったトップの迅速な意思決定が存在したことが理解される。例えば、あるトップは、地震発生直後、別の場所で会合を開催していたが、それを全部中止して急遽神戸に戻って災害対応に従事した。あるいは、別のトップは、被災者に対して物資を供給する必要から何が何でも店を開店した。このように、優れたトップには、キーポイントになった迅速な意思決定が必ず存在する。そして、そのような意思決定が下せた人物がいたからこそ、その組織も何とか震災を乗り越えられたというような事例が多々見受けられた。

そうした迅速な意思決定はどこから生まれるのか。インタビュー記録を読めば、組織のトップにせよ、一般の被災者にせよ、過去の似たような経験、あるいは、阪神・淡路大震災よりももっと大変な経験（特に太平洋戦争）に比べたら、「たいしたことはなかった」

と話す人々が多いことが分かる。阪神・淡路大震災以前から、様々な形で準備があったということの意味が大きいのである。一般の被災者には、戦争経験から毎日、風呂に水を溜めていたという人もいた。こうした物的な備えとともに重要であったのが、過去の経験を参照しながら動けた（つまり、心の準備があった）ことが非常に重要であった。それができるのも個人の能力ではあるが、少なくとも誰しもが震災をゼロから重大事態だと認識することはできなかったであろう。迅速な意思決定を下すことができたトップには、必ず何らかの参照ポイントがあった。それがどの体験によるものか、または、どの情報によるものかは個人に依る。だが、いずれにしろ何らかの参照ポイントが必ずあり、それと阪神・淡路大震災を比較して、「これはすごい」といった事態認識を持ったということが読み取れるのである。もっとも、こういう事態だけではなく、何か新しいことに直面したときには、必ずそれに類似あるいは関係しそうな事象を参照しながらいろいろと考え対処されていくものである。そうした普通の行為の一つに、重大事態というケースもあるといえよう。

したがって、災害対応従事者に、参照ポイントがなければ、事態を認識するのが遅くなることもあるだろう。そこで、そうした災害対応従事者にとっては、過去の災害対応のインタビュー記録は、利用価値が高いと考えられる。参照ポイントを仕入れるために、災害対応従事者が、当プロジェクトのような過去の記録を使用することは可能であろう。その点で、現場の災害対応従事者にとっては、短い指示を羅列した箇条書きの過去の教訓よりも、「この災害は過去のこの事例と近いからこうしよう」などと、直面する災害と比較し、そこから連想できるような当プロジェクトのインタビュー記録は利用価値が高いのである。

第四節 教訓の連鎖

林チームのインタビュアーは、当プロジェクトを通じて、かなり詳細な情報を収集してきたが、30年非公開という原則の前に、それを第3者に伝える方法についてはあまり検討してこなかった。だが、実際には、当プロジェクトでインタビュー対象者によって語られた教訓は、暗黙知として、阪神・淡路大震災以降の災害に次々に生かされる。それは、林チームのインタビュアーの頭を通して間接的に伝えられたり、あるいは、被災地の自治体職員の間で次々と学習の連鎖が生まれていたりするのである。災害対応従事者の多くにとって最大の不安は、この先どういうことが起こるのか分からないまま対応していることである。これに対して、当プロジェクトで阪神・淡路大震災の教訓を知る林チームのメンバーが被災地に赴き、「前の災害ではこういうことがあって、今後発生する可能性のあるものにはこういうオプションがあります」と知らせたことが非常によろこばれた（「一歩先のアドバイス」と呼んでいる）。それは、林チームのメンバーだけではなく、神戸市職員も同様のアドバイスを中越地震の被災地において行い、さらに、中越で被災した市職員が能登地震の被災地において同様のアドバイスを行っている。いわば、被災地間で学習の連鎖ができあがっているのである。

このように、被災経験を持つ行政職員や林チームのメンバーが即戦力として、自分たち

の教訓をそのまま次の災害対応に生かすことはできる。しかし、行政にとって、それはあくまでも属人的な話であって、組織的、かつ、継続的に教訓が継承されているわけではない。行政は、災害対応の教訓を記録として残し、それを伝えていくことをしないものである。この点で、当プロジェクトが収集してきた記録の持つ意義は大きい。例えば、阪神・淡路大震災以降の災害被災地（例えば2004年の中越地震における小地谷市）で支援活動を行った際、当プロジェクトの記録を災害対応従事者に直接読ませたいという局面が多々あった。3時間におよぶインタビュー記録を読むことが困難であれば、15分ぐらいで読めるように縮小した記録であっても、そのときの災害対応従事者にはかなり役立つのではないかと考えたことがあった。先にも述べたが、災害対応従事者にとっては、目の前の現場の情報をどう解釈するかが問題である。つまり、彼らは、災害対応の経験が詰まった様々な引き出しを必要とする。この点で、当プロジェクトが収集してきたオーラル・ヒストリーの記録は、災害対応従事者にそうした引き出しを提供するという重要な役割を果たす可能性を秘めているのである。

第三章 「阪神・大震災犠牲者聞き語り調査（室崎益輝チーム）」が得た教訓

【研究会報告者】 室崎益輝 関西学院大学総合政策学部教授

京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了後、京都大学工学部助手などを経て、1987年より神戸大学工学部教授。その後、独立法人消防研究所理事長、消防庁消防大学校消防研究センター所長を経て、2008年4月から現職。工学博士。専門は、都市および建築の防火・避難計画。

第一節 聞き語り調査の目的

聞き語り調査の概要を簡単に説明しておきたい。当調査は、約6000人の犠牲者の傍にいた人、あるいは故人をよく知っている人を対象としている。その中には、故人の親戚や非常に親しい友人も含まれてはいるが、基本的に対象は遺族である。インタビューは、主として亡くなった方の亡くなったときの状況を中心に聞くことを内容とする。当調査の特徴は、実施者である学生が被災者の話を単に聞くだけではなく、互いに語り合うという手法をとっていることにある。言い換えれば、被災者と学生が、そのコミュニケーションの中から様々なことを感じ取っていく、お互いに心を通わせながら話をしていくのである。当調査のインタビューを「聞き語り」と称するのは、まさにそれが、単なる聞き取りやヒアリングではないことを表している。

当調査については、神戸大学工学部の建築系の2つの研究室（北後研究室・塩崎研究室）の大学院の修士課程1年生が担当するという慣例が定着している。大学院2年生は研究が多忙なので、1年生が交互で調査を行う。今まで約100人を超える大学院生が当調査に関わってきた。したがって、当調査は、いわゆるプロの研究者やインタビューアーが行うものではないため、かなり素人的な取り組みであることも理解する必要がある。

なお、聞き語り調査の記録の一部は、研究のために一般に公開されている。ただし、当調査会自身は、一切、それらを自らの研究業績とせず、むしろ、淡々と記録を残すという立場をとってきた。この立場を取っている理由は、仮に聞き語りの記録を用いて論文を書こうとすると、その締め切りに合わせて調査を急いだり、あるいは、その時々の研究活動に応じて聞き語り調査の収集量が左右されたりすることになりかねないからである。それは、丹念に事実を残すという当調査の趣旨からの逸脱を意味する。当調査は、あくまでもボランティアであって、調査記録を利用するという気持ちがあってはならないというのが原点なのである。当調査会はこの立場を厳守してきたので、その分析は未だ行われていない。

当調査活動を開始したのは、阪神・淡路大震災直後の1995年8月であった。それから、今までに犠牲者359名分のヒアリングが終了している。この数字は、6400人に対して5%程度であり、全体としては限りなく少ない。他方、サンプル数としては比較的多いかもしれないが、ある程度の偏りを持ったサンプルの可能性もあり、その点は、分析上、注意を要しよう。

当調査は、（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構（当初は（財）阪神・淡路大震災

記念協会）の支援の下、オーラル・ヒストリー事業の一部として活動を継続している。ただし、他のチームとは異なり、遺族の了解を得た上で、さらにプライバシーの観点から表現を少し和らげたり固有名詞を隠したりする作業を行った後、聞き語り調査の一部は人と防災未来センター・資料室にて一般に公開されている。

次に、当調査活動を始めた背景について説明したい。それは阪神・淡路大震災以後の3つの個人的な体験と結び付いている。第一に、阪神・淡路大震災発生第一日目の経験である。地震発生の当日は、大阪にいたので現地調査にも行けず、出演の機会を与えられないテレビ局の控室でただ一人悶々としていた。その折、思い出していたのが、同じ火災の研究者としてバイブルの如く尊敬する寺田寅彦の活動であった。関東大震災のとき、寺田寅彦は中村清二という同僚とともに、東京大学の学生を使って火災の延焼動態の非常に緻密な記録を残した。その記録は、延焼速度式（火事が起きたらどういう速度で燃えるのかということを割り出す式）など、現在の研究上の重要な基礎資料となっており、その調査がなければ現在の研究も成立し得ないほどの重要な記録である。地震発生初日、これを思い出し、「寺田寅彦のようにになりたい」と決意したのであった。そして、調査すべき項目を洗い出した結果、まずは火災の研究が重要であると判断し、翌日からは、火災の調査のために被災地に入った。だが、火災の調査を行う過程で、阪神・淡路大震災は関東大震災とは異なり、大半の犠牲者は火災ではなく住宅の倒壊によることが分かった。そこで、阪神大震災の主要局面である、住宅がなぜ倒壊したのかという問題の調査を開始した。まず、1995年1月の末に、この火災調査のグループに建築学会、都市計画学会の仲間が加わり、一晩で作成した建物調査の調査表を基にして建築調査を行う決断を下した。これはその後、50万棟の全数調査に広がっていく。さらに、この調査が、建物調査だけではなく、「どうして人が亡くなったのか」という調査にまで拡大したのであった。だが、相手が逃げない建物調査に比べて、人を対象とする聞き語り調査はより難しい調査となった。

聞き語り調査を開始した第二の原体験は、1995年の秋に早稲田大学で開催されたシンポジウムであった。そのとき、パネルディスカッションで同席した柳田邦男氏が雑誌に掲載されたビートたけし氏のコメントを紹介したことが強く印象に残ったのである。それは、「阪神・淡路大震災は、6000人が一度に亡くなった災害ではなく、一人一人が6000回連続して亡くなった災害なのだ」という短いコメントであったが、「一人一人の個人の記録を大切にしたい」というメッセージと受け止められたのである。これが、聞き語り調査を始めた一番大きなきっかけとなった。また、翌1996年3月には火災学会において、被災者がどのように逃げたのかという調査を行った。神戸市内で行った報告会は、市民が約300人も集まる盛況ぶりであったが、そのときの一人（調査対象者）が「私が答えた部分は、結果としては、この15%のうちの0.1%ですか」と、非常に不満げに語った。この発言は、様々な経験が0.1%という数字でしか表されないことに対する不満の表明であり、これが強い刺激となって、個々の被害をまとめる作業の必要性をあらためて痛感したのである。

聞き語り調査を始めた第三の要因は、震災1年後くらいに太田裕北海道大学名誉教授の呼びかけに神戸大学が応じてできた「人的被害研究会」での経験であった。この研究会は建築構造に通じた建築家と医師（神戸大学の救急医の石井昇教授、兵庫県医務課監察医で

あった西村明儒氏ら）が「どうして人が亡くなったのか」を共同研究することを目的としていた。そのとき、研究会メンバーであった淡路島の診察所の井宮雅宏医師から、彼が最後に看取った20人ほどの調書（井宮メモ）が提供された。地震が発生した際には、すぐに机に潜ることが常識となっている。しかし、井宮メモには、机が壊れた結果、その下で亡くなった人の絵があった。机が壊れた様子が非常にリアルに描かれていたその絵は衝撃的であり、ここでも、個人の死を詳しく記録に残す必要性を痛感したのであった。以上のように、様々な伏線の中から、一人一人の犠牲者の話を丹念に聞き、その事実を集積することを目的として、聞き語り調査は始められたのである。当初は、6434人の犠牲者全員の話を集めることこそ、被災地の責任を果たす仕事であるとの意気込みであった。

では、聞き語り調査の目的は何であったか。第一に、研究・分析を目的とはせず、あくまでも後世の人々のために記録を着実に残すことであった。研究・分析のための調査となれば、そのための項目を立て、「Yes or No」という形式で、アンケートをとるような形式をとったことであろう。しかし、聞き語り調査は、そのような形式は一切取らず、話の展開のすべてを相手に委ねた。こうした形式によれば、林チーム同様、調査の対象者が一番話したい内容が勢いよく展開していく。聞き語り調査は、それをできる限り遮ることなく、遺族の話をそのとおりに聞いていく。

目的の第二は、犠牲者の死亡原因の究明である。聞き語り調査は、あくまでも記録を残すことが最大の任務と考えられていたが、初期の頃から、「なぜ亡くなったのか」という原因については証言の中から汲み取りたいという問題意識はあったのである。

目的の第三は、学生のために、専門家としての学びの糧にするというものであった。大学では家が壊れれば人が死ぬという現実は一切教えられない。しかし、将来建築家となって家を建てる学生は、自分たちの作る建物がなぜ壊れ、なぜ人を殺すことになったのかという原因を知らなければならない。したがって、聞き語り調査は、非常に辛い仕事ではあったが、学生の将来にとっては非常にプラスになると考え、学生に任せることとしたのである。聞き語り調査会は研究者を多数輩出すると同時に、社会人となった学生たちの成長も著しかった。災害に伴う悲しさや辛さ、あるいはそれが社会に及ぼす影響は、遺族の声を通してしか知り得ない。時には、どなり合いになったり突然泣き出されたりする聞き語り調査の現場を何度も体験することによって、学生たちは、研究者として普通は得られないものを得たのであった。このように、聞き語り調査は、学生の学びの場として非常に意味があった。

第四に、聞き語り調査が、遺族の持つ心の葛藤を整理する一助となるということである。遺族は心の中に様々な葛藤を抱えている。例えば、子どもを亡くした被災者の中には、「どうして自分の子供が死んだのだろうか。俺の改装の仕方が悪かったに違いない」と考える人がいる。これに対して、聞き語り調査は、「いや、そうではない。この土地は非常に地盤が悪い場所であり、そもそも、どのような建て方をしても倒壊は免れなかった」と指摘することもある。このように、聞き語り調査会と遺族が遠慮なく語り合うことで、遺族が犠牲者の死をある程度納得するプロセスが形成される場合もある。

これらが聞き語り調査会の目的ではあるが、あくまでも、一人でも多くの犠牲者の記録

を残すことが基本的な目的であって、他の目的は副次的なものである。

第二節 聞き語り調査の進行

学生中心の聞き語り調査には、仕事の正確な引継ぎを目的として、マニュアルが存在する。学生たちは、そのマニュアルに従って聞き語り調査を行う。これは、非常に詳細かつ丁寧なマニュアルである。それは、例えば、「遺族を訪問したら、まず、仏壇に手を合わせる」等、遺族の心情に配慮し、「こういうことを心がけて下さい」とか、「こういうことは余り聞かないように」等、様々なケースに即して、聞き語り調査の進め方を非常に丹念に記述したマニュアルである。

聞き語り調査は、まず、遺族を見つけるところから始まる。当初は、まず淡路島から調査を開始した。その結果として、38名が亡くなった淡路島で、30名の遺族を特定し、そのうち、19名の遺族までは調査を実施することができた。その経験から、6000人以上の犠牲者全員の記録収集は無理としても、3000人であれば記録収集も可能という見通しを立て、次に、神戸市長田区の鷹取町に調査を進めた。しかし、調査はここで挫折する。鷹取町は多くの家屋が焼失したために遺族が他の土地へと移動しており、また、家が倒壊しただけではなく焼失したという惨状を経験した遺族は沈黙し、ほとんどの調査依頼が拒否されたのである。そこで、鷹取町のプロジェクトと平行して、東灘区の本山や灘区の六甲道でもプロジェクトを立ち上げた。これらプロジェクトは、一軒一軒に丹念に遺族の所在を訪ねていくという方法をとった。行政には慰霊祭の案内状を送付するための遺族のリストが存在するが、これは個人情報保護の観点から、入手することが出来なかった。したがって、遺族の所在を知るには、新聞記事に名前が出たところを尋ねる方法しかなかったのである。この状況が最大の障害となって、現在では、ほとんどの遺族が見つけられていない。また、遺族の所在が分かっても、そもそも震災の話をしたくないという人もいるし、学生や研究者が訪問すると「どうせ大学の先生は自分の興味で何か論文を書くために聞きにきているのだろう」と思う方もいる。ただし、現在は、NHK神戸放送局が1日に5回くらいラジオで繰り返し聞き語り調査会を紹介しており、それを通じてのアクセスもある。

聞き語り調査は、聞き役と記録係の二人一組（録音だけではなく、ビデオ撮影を行う場合は、ビデオ担当者も入れて三人一組）で行い、およそ2時間程度を要する。まず、故人の生い立ちや健康状態、性格、どんな生き方をしていたのか、どんな仕事をしていたのか等から話を伺う。この質問への回答は極めて貴重である。例えば、淡路島で亡くなった人の記録の中には、もともと九州の炭坑で働いていたが閉山により失業したため、親戚を頼って淡路島に来たという話があるが、その記録からは、昔、淡路島に造船所があったことが分かる。このように、聞き語り調査の記録の中には、被災地の歴史的背景が多く語られている。そもそも、犠牲者は、神戸に住んでいなければ被害には遭わなかった。聞き語り調査の記録には、故人が被害に遭遇するに至る歴史的経緯が厳然と語られている。

次に、犠牲者が亡くなられたときの具体的な状況を伺う。被害を受けた家屋がどういう状況で、いつごろ建てられ、いつごろ修理され、どのような構造の建物だったのか等、住まいの状況である。あるいは、すぐに人が助けに来てくれたのか等、地域の状況も伺う。

第三に、犠牲者が発見されたときの状況である。例えば、「息をしていた」とか、「病院に運ぶ途中で亡くなった」とか、「誰が助けにきた」とか、「どこから助け出したのか」といった内容が語られる。

第四に、犠牲者の死因を伺う。例えば、「検死では地震直後3分に亡くなったと記述されているが、そんなはずはない」とか、様々なことが語られている。特に、聞き語り調査会の学生は建築を専攻しているため、「住宅がどうして壊れたのか」とか、「家がどういう方向で壊れたのか」といったことについては比較的詳細に質問を行っている。その記録からは、「全壊」や「生き埋め」といった表現だけでは分からなかった、被害の詳細が理解できる。例えば、2階よりも1階が危険だとはよく言われるが、8割方が1階で亡くなっていることを示す聞き語り調査記録は、その通説を裏付けるといえよう。また、医師のデータを分析し家具の転倒による死者はほとんどいないと結論付ける研究がある。だが、聞き語り調査では、死因として、梁や壁の落下が全体の6割、仏壇や大きな家具の転倒が3割、そして、残りの1割がその他という結果となっている。したがって、この調査結果からは、転倒防止等の家具への対策が、あらためて重要であることが理解されよう。このように、個別調査に特徴付けられる聞き語り調査記録の分析は、統計分析では捕捉できない事実を明らかにするのである。

以上4つの項目についての記録を収集するに当たり、聞き語り調査は、事前に簡単な質問表を遺族に送付し、あらかじめ回答してもらう。加えて、全ての調査において、建物の図面を収集することになっている。調査時に、まず、家の間取りや、どこで亡くなられたかという基礎事項を質問する過程の中で、図面記録が作成される。その図面は、寝ていた場所、家具の配置、壁の構造などが記述されているため、これが分析されればさらに様々な知見がもたらされると考えられる。

音声記録に関しては、全ての調査につきテープを保存している。聞き語り調査は、遺族の心情を察し基本的にはビデオ録画をせず、およそ音声テープのみを残すこととしている。また、ほとんどの遺族からは、個人の写真や壊れる以前の建物の写真を提供していたが、資料として文章記録に添付している。記録は、個人別にファイルを3冊作成する。1冊は遺族に提供し、他の1冊は人と防災未来センターの資料室に提供し、そして、残り1冊は聞き語り調査会が保存することになっている。聞き語り調査が、遺族に喜ばれる最大の理由は、このファイルの提供にある。それは、故人の記念になるし、その記録を残せるからであろう。

第三節 聞き語り調査の研究成果

では、聞き語り調査を通じて見えてきたものは何か。第一に、聞き語り調査記録からは、多くの故人の死が様々な要因に左右されていたことが分かる。まず、死が偶然に左右されたケースは、予想以上に多く見られる。たまたま炭坑が閉山して淡路島に移住したところ被害に遭ったというケース、たまたま遊びに来ていた孫が「おばあちゃんと一緒に2階で寝たい」と言い、そこで祖母と孫が一緒に寝ていたところ、孫が亡くなったというケース、そして、連休が明ける前に東京に帰ろうと思っていた故人であったが、母親が

「もう一晩泊まっていけ」と言うから泊まって被害に遭ったというケースなどである。また、聞き語り調査記録からは、故人の死の背景にある、人間関係や被災地の歴史、そして、時代の社会背景を知ることができる。例えば、建築構造上、危険な住宅が残っていかざるを得ないような社会問題があったことや、あるいは、家庭内の不和から故人を放置していたところ被害に遭ったことなどが語られている。また、学生の犠牲者の多くは、親の仕送りを断るなどして、木賃アパートに住んでいたがために亡くなったことが分かる。ここからは、当時の学生の、清く正しい生き方が垣間見えるのである。この点で、一般的に災害の原因は地盤や建物構造、そして救援・救助といった字句で説明されがちであるが、聞き語り調査記録は、そうした字句では括ることのできない様々な原因が厳然と存在することを教えてくれるのである。

第二に、細やかなサバイバル・ノウハウを知ることができる。例えば、「北枕で寝ると助かる」というものである。それは、大きな頑丈な壁に頭を向けている人は亡くならず済むケースが多かったが、そうした大きな壁は北側にあるのが一般的だからである。また、「小さな家具は命を守るが、大きな家具は命を奪う」とか、「地震の大きさによっては机の下に潜ると危険な場合もある」とか、「長持ち筆筒の横に寝ていた人は助かった」とか、こうした一種のサバイバル・ノウハウのようなものが聞き語り調査記録を通じて明らかとなるのである。その中には、常識と思われているサバイバル・ノウハウを見直すヒントも隠されている。例えば、地震発生直前まで2階に居たが、なぜか階下の台所で亡くなった人がいる。故人は、恐らく火の始末をするために台所に向かい被害に遭ったのであろう。そうであれば、「グラッときたら火の始末」という訓辞も、真実かどうかを検証せねばなるまい。

第三に、「阪神・淡路大震災では、地震直後の1時間に8割の人が死んだ」という通説へ疑問である。現在、耐震補強が重要視されており、ともすれば、耐震補強だけをすれば安全であるかのような考え方すら強く表明されるに至っている。その根拠となっているのが、阪神・淡路大震災の際には、最初の30分で8割から9割が亡くなったという通説、そして、犠牲者の死因のほぼ全てが家屋の倒壊による圧死であったという通説である。この通説の根拠となっている、神戸市の専門の監察医が作成したデータでは、犠牲者の死亡時刻がすべて5時46分となっており、その死亡原因は全て家屋の倒壊となっている。だが、これに対して、監察を行った町医者が作成したデータには死亡時間にかなりのばらつきが見られる。阪神・淡路大震災の際には、専門の監察医も町医者も観察に当たったのであるが、信頼性が高いのはどちらのデータであろうか。私見では、専門の監察医のデータは、クラッシュ症候群等の医学的な死因の分析に関してはより精緻であるが、犠牲者の死亡時刻と死亡場所の特定に関しては、町医者のデータの方が詳細であると考え。なぜなら、町医者は、病院に駆け込んできた人々の話を非常に丹念に聞いて犠牲者の記録を作成しているからである。これに対して、専門の監察医は医学的な死亡原因の特定に力を入れるが故に、次々と運び込まれる犠牲者を前にして、死亡時刻の特定の手間を省き、それを一律に5時46分とした節があるのではないか。

このことを裏付けるように、聞き語り調査記録においても、地震発生後即死という記録よりも、地震発生後から1時間、2時間は生きていたという記録の方がはるかに多い。こ

うした記録は、「生きていたはずだ」という遺族の思いが反映されることを割り引かねばならないが、それにしても、「1時間、2時間は息があった」、「声が聞こえていた」という記録が圧倒的に多いのである。つまり、聞き語り調査記録は、通説で考えられている割合以上の人々が地震発生後も生存していたこと、そして、自衛隊等の救助組織や医療組織がより早く活動を行っていたら助け出されていた人々がかなり居たことを明らかにするのである。このように、個別のヒアリングに特徴付けられる聞き語り調査は、統計では見えてこない、個別のケースが持つ意味を明らかにする。したがって、今後は、統計的な解析で得られてきた知見に、聞き語り調査から得られた個別性を適切に結びつけた分析が必要となろう。

最後に、震災体験者と非体験者、あるいは、被災者と防災研究者と一緒に話し合ってきた成果は限りなく大きい。多くの遺族から「この調査を受けてよかった」という手紙を受け取るとき、この調査から遺族が何かを得ていることを感じる。また、遺族だけではなく、調査した学生も非常に重要なものを得ていると思われる。聞き語り調査を、細々としなくても、最後まで継続しなければならぬと感じる根拠は、ここにある。

第四節 聞き語り調査の今後の課題と展望

阪神・淡路大震災の復興の第2ステージであった10年が終わり、次の10年に向かう今、我々のなすべきことは何か。大切なことは、着実に体験を伝えていくことであり、その点では、聞き語り調査は極めて重要である。したがって、聞き語り調査会の今後の目標は、こうした当調査の重要性を再確認しつつ、調査記録が犠牲者総数にははるかに及ばずとも、例えば毎年1人ずつのヒアリングとなったとしても、地道にあきらめずに調査を継続していくことである。

現在、聞き語り調査は、大別して3つの課題に直面している。第一に、時間の壁である。時間が経てば経つほど遺族の所在が分からなくなる問題である。先述したとおり、行政が持つ遺族のリストは、個人情報保護法が壁となって、入手することが出来なかった。その結果として、聞き語り調査は、遺族からの連絡を待つ他はないのであるが、それでは、調査の絶対数が増加しない。時間の壁によって、ほとんど把握できなくなった遺族の所在をどのようにして知りうるかが大きな課題なのである。

第二に、心の壁である。先述したとおり、聞き語り調査は、ヒアリングを行った遺族の多くから感謝して頂いている。だが、調査の入り口では、強い拒否の壁があり、なかなか気持ちよく調査が受け入れられない場合もある。聞き語り調査は、遺族の悲しみの記憶をよみがえらせる作業でもある。「心の傷をさらに深めることにもなりかねない」と遺族は危惧するのである。

第三に、調査の進め方の壁である。聞き語り調査の失敗の理由は、神戸大学の一研究室が始めたことに起因する。その結果、現在では、様々な団体に協同を呼びかけるのであるが、「それは室崎さんがやっているから、我々は邪魔できない」と言って敬遠されるに至っている。当初、遺族へのヒアリングは、大学ごとに被災地を地域割りをして実施する予定であったが、他大学の賛同が得られず、一研究室が実施することとなった。この時点

で、大学間協力が困難であれば、学会全体や兵庫県全体で実施するような体制が構築されるべきだったのである。そこで、こうした反省も踏まえて、今後は、聞き語り調査を、被災地全体の運動として展開したいと考えている。例えば、一研究室の枠を超えた、政府等による大規模かつ確固とした事業展開が必要かもしれない。差し当たり、遺族の情報を持つ放送、新聞、雑誌といったメディアと着実に連携を持ちたいと考えている。もっとも、一般的にメディアは取材情報を提供することに抵抗する場合があります、遺族の情報が提供されない場合もある。しかし、聞き語り調査が、そうした原則以上に重要な活動であることを説明し、協力を求めていると考えている。

また、先述した心の壁を考えた場合、聞き語り調査は、最終的には、遺族が遺族自身で犠牲者の記録を残すという運動に発展することが好ましいと思われる。第三者が遺族に対して「あなた方の経験は大切ですから話して下さい」と依頼する活動ではなく、遺族自身が「私たちの声を将来に届けたい。私たちの悲しい経験を世界に発信したい」という活動であれば、遺族も少しずつ話をしてくれるかもしれない。そうした遺族の活動を助ける体制を整えることによって、より多くの犠牲者の記録を収集することが可能となろう。

聞き語り調査が、現在、遺族からの協力を得られない原因として、収集するのみでは、その成果や意義が見えにくいという現実がある。そこで、聞き語り調査の意義を明らかにするためにも、それを分析することによって、具体的に「このように役立つ」ということを目に見えるような形で示す必要がある。例えば、調査記録を分類し、そこに解説を付けたり、統計データや先行研究の成果を引用するなどして、「阪神・淡路大震災では具体的に何が起こったか」ということをまとめて出版することも考えられる。あるいは、解説なしに、調査記録をそのまま出版することも考えられよう。いずれにせよ、聞き語り調査の意義を一般に示すことにより、その活動の広がりも期待できる。それは、聞き語り調査の初心に立ち返ることでもある。先述のとおり、そもそも、聞き語り調査を開始したときの初心は、この記録を後世に生かし、被害の軽減につなげるところにあった。統計ではなく個別の記録から、人の命を守るヒントや教訓、そして課題が明らかになると考えられたのである。したがって、今後は、聞き語り調査の記録を単に残すだけでなく、それを災害対策に生かす方途を模索し、人類の共有財産とする努力を払いたい。

また、聞き語り調査の公表に当たっては、現在のように資料室の片隅に展示するだけでなく、広島原爆死没者追悼平和祈念館のような施設において、故人の名前から一人一人の顔写真や記録へとアクセスできる設備を完備することも一考である。聞き語り調査記録をこのように公開することによって、そこに未だ記録が留められていない遺族が集まってくることも考えられる。30年非公開の原則による制約はあるが、他方、むしろ積極的な公開を望んでいる遺族もいる。したがって、公開の了解を得た記録に関しては、さらに多くの人々に触れられる機会を設けるべきであろう。

おわりに まとめと提言

第1節 研究成果

本研究は、当機構が保有する阪神・淡路大震災オーラル・ヒストリー記録から教訓を汲み取とることを目的とするものであった。そこで、そのインタヴューアーがその記録から得た知見を分析し、それを4回にわたる研究会（「オーラル・ヒストリー記録に基づく災害時対応の教訓の活性化」研究会）において報告してきた。もとより、オーラル・ヒストリー記録に含まれた情報は膨大であり、また、時代や個々人によってそこから得る教訓は多様である。ただし、本研究を通じて、少なくとも下記の二つの点が明らかとなった。

第一に、阪神・淡路大震災の多様かつ奥行きある実像である。当オーラル・ヒストリー・プロジェクトの林チームと室崎チームは、インタヴューアーが仕切るのではなく、インタヴュー対象者の語りに即した聞き取りを行ってきた。というのは、阪神・淡路大震災は普通に体験される事態ではなく、当事者にとって例外的な一回性の体験である。この常ならぬ「実態に即した重要なポイントをインタヴュー対象者から引き出すには、あらかじめインタヴューアーが用意したポイントを質問していくよりは、インタヴュー対象者が出してくる話をそのまま引き受けていく方が効果的なのであった」（田中報告）。インタヴューアーは常識によって仕切りすぎることを慎み、本人が体験し見たものと心象風景を尊重する。本人の独自の語りの引き出し役に留まる手法をとった。特定の研究関心からデータをつくることではなく、大震災をありのまま永遠の記録として残すためのオーラル・ヒストリーであった。その語りの中で自ずとキーポイントが浮き上がる。その結果、当記録は、インタヴューアーの想定しなかった、阪神・淡路大震災における意外な事実を明らかにしている。

とりわけ重要な例は、室崎チームが明らかにする阪神・淡路大震災の犠牲者の死亡推定時刻をめぐる事実である。室崎チームは、通説とは異なり、かなりの犠牲者が、「（地震発生後から）1時間、2時間は生きていた」、「（しばらくの間、ガレキの下から）声が聞こえていた」という多くの遺族の記録をとどめている。この事実は、室崎委員が指摘するように、防災といえは耐震補強一辺倒に傾きがちな昨今の風潮に一石を投じ、自衛隊や警察等の救助組織や医療組織の初動体制のさらなる整備を促すであろう。震災と犠牲者の状況を統計学的に説明するアプローチに、具体的な一人一人のケースからの説明を加えて修正補強する必要がある。室崎チームのインタヴュー記録は、そのための最良の根拠となろう。

また、当記録は、インタヴュー対象者が阪神・淡路大震災に遭遇する以前の人生をも記録にとどめる。大震災以前の人生をとどめる記録からは、インタヴュー対象者の人間関係や被災地の歴史、そして、時代の社会背景を知ることができる。室崎委員が指摘するように、オーラル・ヒストリーは、阪神・淡路大震災には、地盤や建物構造、そして救援・救助といった字句では括ることのできない歴史的、社会的な様々な原因が厳然と存在することを教えてくれるのである。

例えば、五百旗頭チームや林チームのオーラル・ヒストリー記録は、組織の責任者の初期の事態認識が災害対応に決定的に重要であることを明らかにしている。だが、ここで重要なことは、この記録が、そうした事態認識を持ちえた災害対応従事者には往々にして現場体験が既に蓄積されていたという事実を明らかにしていることである。

この点では、五百旗頭チームによる後藤太郎・元芦屋市助役のオーラル・ヒストリー記録が興味深い。後藤氏は、阪神・淡路大震災の災害対応従事者の中であって、珍しく迅速に意思決定できたリーダーであった。後藤氏は、岩園の自宅で地震に跳ね上げられた途端に、事態の重大性に気づき、市役所まで走った。市役所に飛び込んだ後藤氏は、当直室にいた二人の部下に対し、一人を医師会会長の下へ走らせ全面的協力を要請、もう一人は寺院に走らせ、遺体の安置を要請した。なぜ、後藤氏はこのように、かなり正確な事態認識を持ち、なおかつ、異常事態の中で必要な対応を洞察することができたのか。戦後日本の地震非活動期に働いてきた後藤氏には地震に対する経験はなかったという。しかし、後藤氏のキャリアパスは、事務職ではなく、絶えず現場にあった。後藤氏は、そこで、芦屋市における風水害等の災害対応の現場経験を積んできたのである。こうした現場主義の後藤氏であったからこそ、未経験であった大地震に対しても、過去の経験を応用して、事態を把握し、そして、次々と必要な対処を考察することが出来たのであった。

この点で、林チームは、その人が「参照ポイント」としうる過去の類似の体験、もしくは「もっと大変な経験」を持っていることの重要性を指摘していることは興味深い。「太平洋戦争に比べたら、たいしたことはなかった」と語って、神戸地震を軽くこなせる人がいたというのである。神戸地震体験者がその後の災害や危機において活躍することも、同じ原理で説明可能であろう。

また、室崎チームの記録にも、遺族が故人を偲ぶ語りの中に様々な事実が含まれている。例えば、夫を震災で亡くしたある遺族は、資金面で苦勞しつつも所有するアパート再建を見事果たした。記録からは、その背景には、震災以前に築かれていたアパート住民との強い絆が存在したことが理解されるのである。このように、オーラル・ヒストリーは、阪神・淡路大震災に遭遇する以前の経験が、大震災直後の事態認識や復興過程において大きな影響を持ったことが分かる。

第二の研究成果としては、オーラル・ヒストリーが実際の災害現場で有効であることも明らかとなったことがあげられる。様々な被災地において災害対応に携わってきた田中委員が指摘するように、初めての突発事態にあって見通しが立てられない災害対応従事者に対して、オーラル・ヒストリーに含まれた阪神・淡路大震災の知見を基に、次々と課題設定を助けたことが有益であったとよこばれている。さらに、オーラル・ヒストリーに記録された様々な知見が暗黙知として阪神・淡路大震災以降の被災地に次々と伝えられることによって、災害対応の教訓の連鎖ができあがっているという。こうした、「学習の連鎖」の指摘は示唆に富む。

先述の通り、災害対応においては、リーダーの正確な事態認識とそれを踏まえた対処着想力が決定的に重要である。当オーラル・ヒストリーは、そうした事態認識を持ち得た者が類似の、もしくはそれ以上の太平洋戦争などの現場体験の有無に拠ることを示唆してい

る。この点で、オーラル・ヒストリーの中に暗黙知として蓄えられた阪神・淡路大震災の教訓は、災害対応に不安を抱える被災地の人々の現場経験を補うものであるといえよう。

第2節 政策提言

上記の研究成果をふまえた上で、本研究は、下記の二点の政策を提言する。第一に、将来の災害に備えるべく、キャリアパスの流動性を高めることによって、自治体職員が地元において現場体験を積む機会を増やすことである。

たびたび指摘してきたように、阪神・淡路大震災における災害対応にとって、正確な事態認識を持つことは決定的に重要であり、なおかつ、困難であった。多くのリーダーたちが正確に事態を認識するまでにかなりの時間を浪費する中で、例外的であったのが、後藤太郎・芦屋市助役であった。後藤氏に特徴的であったのは、被災地を知り尽くしたキャリアパスである。このことは、災害対応に指導的役割を果たす自治体職員が災害発生時に正しい事態認識を持ちえるためには、現場体験を積むことが助けとなりうることを示している。もちろん現場体験さえあればよいわけではなく、それを援用して対処を考える応用力や構想力が伴わねばならない。

通常、地方自治体では、個人のキャリアパスの流動性は決して高くはない。特に、事務系と技術系の職員の辿るキャリアパスはかなり異なるのが一般的である。後藤氏のように、災害対応の経験に恵まれ、かつ、現場の土地勘にも秀でた自治体職員は決して多くはない。その結果として、災害発生時に、そうした職員が災害対応に指導的役割を果たすケースは稀であろう。そこで、本研究では、とりわけ将来、地方自治体の幹部になりうる人材に対しては、そのキャリアパスの中に事務職だけではなく、現場体験も盛り込むべきであることを提言する。

第二の提言は、オーラル・ヒストリーの活用である。先の提言のように、自治体職員に現場体験を積む機会を増やすことは重要であるが、自ずとそこには限界がある。また、未経験の新たな災害に直面した場合には、従来の現場体験を応用できなければならない。この点で、オーラル・ヒストリーによって蓄えられた阪神・淡路大震災の教訓が、新たな被災地において不安を抱える災害対応従事者に「一步先のアドバイス」として歓迎され、現場体験を補う役割を果たしていることは先述のとおりである。

したがって、当オーラル・ヒストリー記録を何らかの形で災害対応従事者に直接、提供することができれば、暗黙知としてインタビューアーの頭にのみ蓄積されてきた知見をより広く社会に還元することが期待できる。田中委員が指摘するように、現場の災害対応従事者にとっては、箇条書きのアドバイスは意味をなさない場合が多い。全ての災害は一回性であって、必ずしも過去の事例から得られた教訓がそのまま適応しうるとは限らない。また、箇条書きにされたアドバイスの行間にこそ、実は、暗黙知となっている重要な教訓が隠されている場合が多い。この点で、プロセスを追って記録されたオーラル・ヒストリー記録を読み、そこから教訓を引き出すことは、一見、迂遠のようではある。しかし、それは、各自が直面する災害に応じて自由に教訓を導き出すことができるために、むしろ

ろ、利用価値が高いのである。

第3節 今後の展望

本研究会では、開始から10年が経過したオーラル・ヒストリー事業の今後の展望についても話し合われた。当オーラル・ヒストリー事業が他の同種の記録と比べて優れているのは、震災発生後の比較的早い段階において、聞き取り調査を開始した点である。その結果、震災の復旧・復興に従事したキーパーソンの聞き取り記録を肉声と映像を持って収集することができた。これに比べて、例えば、広島原爆の語り継ぎなどは、その開始時期が遅かったために、せいぜい当時20代から30代の人々の経験は収集できたものの、キーパーソンとして責任ある立場にあった世代の人々の経験は直接記録を残すには至っていないのである。この点で、当事業の主要な特徴の一つであった阪神・淡路大震災のキーパーソンに対する聞き取り調査は、ほぼ終わったと見てよい。

以上のような現状認識を踏まえて、次の10年に向けた展望として二つの方向性が考えられる。第一に、記録収集の継続である。震災体験は未だ多くの人々に共有されているようではあるが、現在、すでに中学生以下の大半は阪神・淡路大震災の経験を持たないし、被災地には他所から多くの人々が流入してきている。そして、数年後には、震災時に組織の中で一番中心になって動いていた人々の多くが退職する。その結果、震災は歴史となり、大切な教訓は伝承されず、数字のみが一人歩きするような状況にも陥りかねない。上述の通り、キーパーソンへのインタビューはほぼ終わっていることから、今後、当事業は、さらに聞き取りの対象の裾野を広げ、未だ眠っている教訓を記録に残しておくことが重要である。

五百旗頭チームでは、昨年度からインタビュー対象者をキーパーソンから、震災直後に救命救助活動に当たった人々に移行している。また、この点に関しては、室崎チームのオーラル・ヒストリーは既に多くの一般の市民へのインタビュー記録を蓄積してきた実績があり、今後のますますの活動の進展が期待される。

さらに、研究会では、世代を超えたローカルな語り継ぎが起こるような機会（例えば、家族内で孫が祖父母に震災経験をインタビューする模様を映像記録として残すような機会）を、人と防災未来センター等の公共施設が提供し、それを一般に公開していくというアイデアも出された。加えて、先述したように、将来の災害対応に活用するという観点からオーラル・ヒストリー記録のあり方を考えた場合には、阪神・淡路大震災以後の災害についても対象を拡大するべきであるとの意見もあった。

第二の展望としては、既に収集された記録を分析し、次の災害において犠牲者を減らすための知恵を引き出す作業である。オーラル・ヒストリー事業は、裾野を広げて継続することが必要であるが、現段階においても、既にかなり幅広い人々の記録を収集することに成功している。阪神・淡路大震災は、国内外で発生している数多い災害の中の特殊なケースの一つに過ぎない。しかし、その特殊な一つのケースについての深い認識があってこそ、その後の災害に対して確固たる対策を立てることが可能となるのである。にもかかわ

らず、阪神・淡路大震災の実像や教訓の発信は非常に弱い。その結果、被災地が見事に復興したことは理解されても、その内実は実は理解されていない。外部の人々が知りたいのは、統計学的なマクロ・データを積み上げた復興の記述ではなく、「何が重要だったのか」というインサイドストーリーである。それを知る唯一の手がかりこそ、当オーラル・ヒストリー記録なのである。そこで、研究会では、オーラル・ヒストリー事業に関与してきたインタビュアーが、その責務として、それぞれの専門的見地から、10年来の記録を分析し、教訓を導き出す時期に入ったとの認識で一致したのであった。

以上の議論をふまえ、平成20年度には、3つのチームそれぞれが1冊ずつの著作を発刊することを目指し、その準備作業に入る。もっとも、当オーラル・ヒストリー記録には30年非公開という原則がある。そこで当面は、個々の記録を分析した上で、その中で語られているエッセンスを抽出し、それをわかりやすく伝えるという作業を行う予定である。

谷川 三郎 元 芦屋市建設部長

「助役がものすごく気をつく人ですからね。素早く来たもんからつかまえて、こうやれと。建設部は、特に機転の利く若いのを一人、助役の近所に置かせといて、『助役の命令はお前聞いてすぐ持ってこい』っちゅう格好の連絡方法にしましたですね。」

当記録は、芦屋市建設部長・谷川三郎氏に対して、芦屋市内の救助活動を中心にお話を伺ったものである。谷川氏は、神戸市北区にある自宅で就寝中に地震に遭遇した。ラジオにて大規模災害であることを認識、近隣に住む同僚の車で市役所に急行するが、石屋川近辺で渋滞に巻き込まれ徒歩にて登庁。市役所に着いたのは昼過ぎであったが、その間に、谷川氏は、事態の重大性を充分認識した。

谷川氏が市役所に到着したときには、既に、後藤太郎・芦屋市助役から建設関係職員に対して救命救助活動に向かうよう指示が出ていた。当記録では、芦屋市役所における、後藤助役の迅速な陣頭指揮の様子が随所で語られている。建設部長の谷川氏は連絡役の部下を一人、助役の下に常駐させていた。下水処理場長等の現場に根ざしたキャリアを持つ後藤助役の指示が、谷川氏を通じて救助・復旧活動の主体たる建設関係の職員の隅々にまで行き渡っていた事が伺えるエピソードである。

谷川氏は後藤助役に登庁の遅れを詫びるとすぐに、救助活動の基地であった市役所に隣接する消防署の一室に向かう。谷川氏は、そこで、建設関係職員・消防職員・消防団からなる救助チームを統括しつつ、自らも救助活動に向かった。しかし、機材不足は否めず、倒壊した家屋の奥深くに埋もれてしまった人を助けることは難しかった。機材に恵まれた東京消防庁レスキュー隊が到着したのは2日目であった。当記録には、救命救助活動以後の復旧活動の様子も語られている。

聞き取り：五百旗頭 真（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構 研究調査本部長
村上 友章（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構 特別研究 主任研究員
日 時：平成18年（2006年）10月27日（金）10:00～12:00
場 所：防災未来館6階 研究調査本部長室

五百旗頭研究会 五百旗頭チーム オーラルヒストリー

[敬称略]

対 象 者：谷川 三郎 元 芦屋市建設部長

聞き取り：五百旗頭 真（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構 研究調査本部長

村上 友章（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構 特別研究 主任研究員

日 時：平成18年（2006年）10月27日（金）10:00～12:00

場 所：防災未来館6階 研究調査本部長室

（五百旗頭） 現場で実際に被災者と接触されたその方々に伺いたいと。その方々に最初の方としてお願いした次第です。

（谷川） はい。よろしくお願いします。

（五百旗頭） 何というんですか、公開して具合の悪いことは、語り部ですずっと語っていらっしゃってないと思うんですけど、もしこれは、出したら差障りがあるということでしたら、30年間は出さないというふうなこともやっておりますけれども、余りそういう問題は。

（谷川） はい。私はもう全くありません。

（五百旗頭） そうですか。ありがとうございます。そしたら、よろしくお願いします。まず、その日そのときをどういうふうにお迎えになったかと。どういう状況で。

（谷川） 私は、今、ご紹介にありましたように、当時、芦屋市役所の建設部長をしていました。住んでいたのが、神戸市北区の西鈴蘭台星和台団地に住んで。

（五百旗頭） かなり芦屋には遠いですね。

（谷川） はい。そこに住んでいました。木造の2階建ての瓦葺きに住んでいたんですが、あの日は2階に、ベッドに寝ていました。で、朝、私はぐっすり寝ていたんでね、ドカンという音がしたような気がしますけども、強烈な縦揺れでしたね。

（五百旗頭） ああ、突き上げるような。

（谷川） 突き上げるような。で、ベッドから飛び起きましたけど、放り投げられた感じで、横に和箆箆を置いてたんですが、これは倒れなかったんですが、そこにしがみついたまま一歩も動けませんでしたね。

（五百旗頭） 鈴蘭台は、割と台地ですし、ひどくはない方だと思いますが、それでもやはり、倒壊家屋なんか周辺ありましたか。

（谷川） いえ、ほとんどありませんでした。私の家も、ほとんど屋根瓦が大部分落ちた程度で済みました。瓦葺だったもので、瓦葺の家だけが屋根がわらが落ちてましたね。でも、倒れている家はなかったですね。

（五百旗頭） 失礼ですけど、家族構成を。

（谷川） はい。私は息子が二人いまして、一人はもう社会人、一人は学生でしたが、

もう既に家を出ていました。ところが、あの日は3連休だったので、ちょうど息子たち2人が帰ってきてくれていた、これが助かりました。で、地震が落ちついて、家内と3人を呼び出しました。もちろん顔を出してくれましたけども。

(五百旗頭) 同じ家におられたわけでしょ。

(谷川) はい。それで、まあ怪我もせずに。家の中は、結構めちゃくちゃになってましたけどね、中はね、食器棚なんかが、倒れはしませんでしたけれども、テレビはひっくりかえってましたし。

(五百旗頭) 2階建ての家、2階のベッドで寝てらして、ほかのご家族の方は。

(谷川) はい、2階と下とでした。

(五百旗頭) ああ、本当ですか。下の方もご無事で。

(谷川) はい、大丈夫でした。おかげさんで北区は被害が比較的少なかったんで、助かりました。

(五百旗頭) ベッドだといいけど、畳の上で寝ていると、物がこう。

(谷川) そうでしたね。たまたま下で寝ておった子供たちは、家具が置いてなかったんで、助かりました。でも、家具は倒れてなかったと思います。私の家はですね。で、今から考えても、あれ、結構、ベタ基礎、基礎をコンクリートでベタ打ち工法の家だったもので。

(五百旗頭) それは、普通よりも強いという。

(谷川) 強かった感じしますね。

(五百旗頭) コンクリートがしっかりした土台になってたんですね。

(谷川) で、そういう状況で真っ暗でしたけども。

(五百旗頭) 電気は消えて。

(谷川) もちろん消えていました。ただね、私は、枕元にいつも携帯ラジオを置いていたんです。ラジオを聞きながらよく寝てたんで。これが助かりました。

(五百旗頭) ラジオ、大きいですね。

(谷川) もちろん最初に、大変なことだと思って、親元が奈良だったんでね、本当に家族大丈夫だということで電話しようと思いましたけど、電話もちろん通じなかったです。

(五百旗頭) すぐにでも通じなかったですか。

(谷川) はい、なかったです。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) でね。ただ、早く伝えたいと思ったんで、私、落ち着いてすぐに家を飛び出して、近くにアメリカンホールというのがあって、そこに公衆電話があったんです。そこへ行ったんです。ほんなら10円玉でかかったんです。カードはだめでしたね。私、両方持って出たんです。で、親元に家族大丈夫だということだけ伝えて、親戚に伝えてくれと言って、すぐに切りました。

(五百旗頭) 奈良の方も揺れたって。

(谷川) はい、もうすごく揺れた言うてました。

- (五百旗頭) それではどっちが震源地かというのが分からない。
- (谷川) すぐわからなかったですね。はい。後から聞いたら、向こうも震度4だと言っていました。
- (五百旗頭) 私も大阪府茨木市の家内の弟から、向こうから電話が入ったんで、私ら家から出られない状況だったんですよ。どちらもすごかったと、こんな地震初めてだと言うからね、同じぐらいだと思ってたですね。ところが、全然その意味が違うんですね。震度4、5でもね、やっぱり初めてのすごい体験なんですけれど、こちらはそれどころじゃないという実態なんですけど。奈良の、そうですか。
- (谷川) それで、まあ大変だと。これは大事故だと思って、ラジオを聞いていて、しばらくしたら、ようやく電車なんかもちろん動いてないということが分かったんで、さあ、どうして行こうかと。六甲越えて、あれ市役所まで25キロほど離れてたんですよ。もう、私も車は持っていたんですが、車はちょうど息子が使って故障してましてね。あんなときに限って修理に出してしまってたんで、もう自転車も単車もなかったんです、私の家は。
- (五百旗頭) ああ、そうですか。
- (谷川) もう歩いていこうと思って、腹をくくって、もう本当に出ようと思ってたときに、同じ団地にもう一人だけ芦屋市役所の職員がいましたんです。彼は若い職員でしたけど、彼がほれで、素早く私の家に車で来てくれたんです。
- (五百旗頭) ああ、そうですか。
- (谷川) ほんで、これ幸いと。車で行こうって、車に飛び乗って出たんです。
- (五百旗頭) なるほど。なるほど。
- (谷川) 私も、今から考えたら慌ててたんでね、こんなときは水とかね、食べ物ぐらひは多少持って出るべきだったですけども、そんなことは忘れて車で出ました。
- (五百旗頭) ああ、そうですか。カードとコイン両方持って出られて、なかなか冷静沈着に対応されてると思いますけれども。そうね、食べ物、水のことまでね。
- (谷川) はい。それはちょっと思いつかなかったですね。もちろん着替えなんかも、妻に言ってね。
- (五百旗頭) 事態の重大性、わかんないですよ。震源地なんかは、もうトランジスタラジオで聞いてらしたですか。
- (谷川) 震源地はまだわからなかったですけども、私がびっくりしたのは、私のぐりりはほとんど倒れてないですけど、ラジオを聞いていたら、表側の神戸がすごい状況だと。それがね、あれ多分、私、ラジオ関西にダイヤルを合わせていたんですが、きっと放送記者が公衆電話からね、本社へ電話しておられるわけ。それを生で流しておられたように。
- (五百旗頭) はあ、それはすごいですね。一番早いです。
- (谷川) だから、記者がもう、そのすごい長田の方の煙の状況とかね。あれね、谷五郎さんのパーソナリティーだったんですけどね、たしか生で流れてたと思

いました。

(五百旗頭) じゃあ、家屋倒壊の状態とか。

(谷川) はい。これは大変だと思って、それで、もちろん車で彼と出たんです。

(五百旗頭) 車はトンネルを。

(谷川) はい。ほんでね、神戸市北区は走れました。

(五百旗頭) はいはい。

(谷川) 私はね、有馬街道を利用か、今おっしゃった六甲トンネルを通るか迷ったんです。

(五百旗頭) ええ。

(谷川) これ、有馬街道は、あれ谷沿いですからね、がけ崩れしとったら大変だと思ったんで、トンネルにしました。

(五百旗頭) なるほど、なるほど。

(谷川) でも、後から考えたらぞっとしましたね。あの長いトンネルを。

(五百旗頭) ああ、トンネルも怖いですよ。幸い通れたようですね。

(谷川) はい。でもね、新潟地震見てたら、あちらではいっぱいトンネルが崩落してました。

(五百旗頭) ええ。

(谷川) で、トンネルを越えて。

(五百旗頭) 新神戸のところへ出てらしたわけですか。

(谷川) はい。あの大きな橋も渡って、神戸大学の横を通って、山幹のあたりまで何とか来れたんです。それがね、大方7時前でしたかな。もう、明るかったですけど。

(五百旗頭) 石屋川のところ、山幹は段差ができて通れなかったんじゃないですか。

(谷川) 石屋川沿いに、あれ下りていったんですけどね。何とかあれ、川沿いじゃなかったですね。

(五百旗頭) ああ、そうですか。ちょっと回って。

(谷川) 何とか、まあ、通れたんですけども、でも、もう車がいっぱいでした。

(五百旗頭) ああ、そこまで来るとね。

(谷川) それで、もう、私ね、もうあせるばかりだったんで、車から降ろしてもらったんです。もう歩いていく言うて。

(五百旗頭) じゃあ東灘のあたりですか、御影あたりですか。

(谷川) はい、はい。御影の公会堂の横を通って。

(五百旗頭) ああ、なるほど。2号線ですね。

(谷川) 2号線を私、ひたすら歩いていきました。

(五百旗頭) ああ、なるほど。

(谷川) でも、歩道はあんまり歩けなかったですね。車道を歩いたり、潰れた。

(五百旗頭) 物が倒れてきていて、車道は車いっぱいだけでも、車止まっているから歩いて。

(谷川) はい。車道と歩道の間ぐらいが歩けました。

(五百旗頭) なるほど。うーん。

(谷川) あちこちで、もうね、助けに入っておられる人もおられたですし、もうご遺体が道端に並べてあるのもある。ちらっと見ましたね。毛布や布団でね、包まれて寝かされて、亡くなっておられるのか、ちょっとわからなかったですけど、まあ、そういう状況の中、ひたすら歩いて行きました。

(五百旗頭) ええ、住吉川を越えて、東灘の本山の。

(谷川) もう東灘が、もう本当にひどかったですね。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) はい。もう何っちゅうたって、神戸で一番たくさん倒れたんじゃないですかね。

(五百旗頭) ああ、そうですか。いい地域なのにな。

(谷川) はい。で、東灘、芦屋へ入って、もう茫然としましたね。同じ状況を見てきたのに、やっぱり芦屋職員として、境界線の上に立って、もう茫然としました。ほとんど、あの辺、辻町、清水町といいまして、ほとんど潰れてましたんで、これはもう、どうして復興させたらええんかなと思いましたね。

(五百旗頭) 市役所に着かれたのは何時ごろだったですか。

(谷川) 昼を回ってました。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) 昼を大分回ってましたね。

(五百旗頭) そうですか。事態の重大性は十分と、十分過ぎるほど見てこられたわけですね。

(谷川) はい。火災は、あんまり見かけませんでしたね、意外と。もう家があれだけぺっちゃんこになってましたんで、余り燃えてはなかったですけど。

(五百旗頭) 当時、建設部長さんでいらしたんですか。少しさかのぼりますけども、その瞬間以前に、こういう防災とか何かに仕事上関わられたことがありますか。

(谷川) はい。これはもう私、建設部長をやる前は下水処理場長もやってましたので、大雨台風、台風対応も随分やってきましたし、そういう、いわゆる役所の防災マニュアルも一応ありましたから、それなりに対応はしてきましたけどね。

(五百旗頭) 下水関係、建設関係というのは、やはり、防災の中心ですから、市における防災というのは、どういう体制とってるんですか。

(谷川) やっぱり、一番最初に、こういう台風とか大雨は予報が聞けますから、予報が出たら災対本部立ち上げて集まって、どう対応するかということをするんですけどね。

(五百旗頭) 防災課とか、防災係というのはあるんですか。

(谷川) そのころはなかったです。

(五百旗頭) なかったですか。神戸市はありましたけどね。

(谷川) 防災担当は、あれ係ではなかったですけど、担当は消防にありました。係がね。

(五百旗頭) 総務か何かが中心になるんですか。

(谷川) いや、ですから、消防の防災係が災対本部を開くんですよね。

(五百旗頭) 消防というのは、市役所の。

(谷川) 真前にありまして。

(五百旗頭) それは、消防は消防の組織ですね。市役所はそれと窓口になる係が、そこが市の防災の中心になると。

(谷川) はい、そうです。でも、もちろん、災対本部には消防長も一緒に、一員で入ってます。

(五百旗頭) 入って、それから下水の人も建設の人も入るわけですか。

(谷川) はい、建設部長も。

(五百旗頭) じゃあ、割と関わりの深いところを歩いていらしたんですね。

(谷川) はい、そうですね。ですから、私たちは特に大雨とか台風が来る前には、災対本部ができる前に、もう担当職員をいろいろつけていました。

(五百旗頭) なるほどね。その大雨、台風はね、我々の地域の花であります、地震とこのについては、どんなふうを考えてらしたんですか。

(谷川) いやー、今言いましたマニュアル本も、こんな分厚いのありましたけども、地震は1ページほどでした。

(五百旗頭) 1ページ。これは想定されていない。

(谷川) 正直に言って。全くしてなかった。

(五百旗頭) そうですか。神戸市あたりだと山崎断層が動いたときとかね、南海でね、プレートが動いたとき、いずれも神戸あたりは震度5という想定でやってたようですが、芦屋市は。

(谷川) 全くなかったです。

(五百旗頭) そこまでも考えてなかったですか。

(谷川) はい、そこまでもなかったですね。

(五百旗頭) じゃあ、風水害のみと。

(谷川) のみ、そうです、はい。もうそう言ってもいいです。

(五百旗頭) なるほど。それが奇襲攻撃を受けちゃったわけですね。

(谷川) はい。

(五百旗頭) そうしますと、お昼ごろに市役所につかれたら、市役所はどういう状態だったですか。

(谷川) もう、市役所の中も被災者であふれかえっていました。びっくり仰天というか。もちろん避難所の指定は、マニュアルではありましたが、市役所なんかはもちろん避難所に指定してませんでしたよね。でも、あふれかえってました。

(五百旗頭) 何か随分あれは、機能を阻害したようですね。

(谷川) そうですね。

(五百旗頭) 人道的に、「出ていけ」とは言えないけれども。

(谷川) それはやむを得ないんじゃないですかね。

(五百旗頭) 総司令部が避難で動けなくなったら、全体救済の活動、困らないですか。

(谷川) でもね、芦屋ぐらい小さな市域でしたらね、私は今から考えても指揮官は1人で十分だったように思いましたね。

(五百旗頭) そうですか。

(谷川) 正直に言って、災対会議なんか、いつ開いたか覚えてないぐらい。

(五百旗頭) ああ、そうですか。もうそれは、実際のことをどんどんやるという意味ですか。

(谷川) はい。私たちはもう、本当によかったのは、何ととってもやっぱり助役が一番先に出て来てくれていて。

(五百旗頭) 助役がね。

(谷川) はい。

(五百旗頭) 後藤さんが。

(谷川) はい、後藤助役が、もう30分後に市役所に。

(五百旗頭) 指揮をとられたようですね。

(谷川) はい。で、助役が1人で指揮をとって、「おまえところはあれやれ、おまえところはこれ」と、こう。

(五百旗頭) なるほど。

(谷川) で、私、昼過ぎてましたんで、とりあえず助役室に行きましたけど、助役室へ行く廊下にも、ズラッと被災者が並んでました。それをまたいで行かないかんっちゃうような。それで、助役に遅れたことを詫びて。もう既に助役は指示を出してくれてたんでね。建設関係職員は救命救助に向かえという指示を出してくれてたと。ほんで、建設関係職員は、前に消防がありますんで、消防署の1室を借りて、そこを基地にしましたわ。

(五百旗頭) ああ、そうですか。なるほど。

(谷川) それで、私も遅れてまずそこへ行って、それ以来ずっとそこに、基本的に消防におりました。

(五百旗頭) 消防におられたんですか。

(谷川) で、助役が後から考えても、すごい指示をいろいろ出してくれてたようでした。

(五百旗頭) 本当にね、大きいですね。

(谷川) ええ。ですから、何日間は災対本部で議論というか、話なんかした覚えも全くないですね。

(五百旗頭) ああ、もうテキパキと指示が行って、みんなで闘うという。そうですか。元来なら、建設部というのは災害のときには、どういう役割を担うわけですか。

(谷川) やっぱり何ととっても公共施設のね、被災状況を調べて、それから素早く復旧させることですよね。基本はそれでしたわ。

(五百旗頭) 何人ぐらいおられるんですか。

(谷川) およそ建設関係3部あって、都市計画部と開発事業と建設部と、これが技

術系の職員のおる部署で、およそ100人ほどおりました。

(五百旗頭) ああ、そうですか。そのお昼ごろ出られたときには、どれぐらいの職員が来てましたですか。

(谷川) そうですね、建設部は30、40%ぐらいは来てました。

(五百旗頭) 3分の1から半分というところ。

(谷川) はい、来てました。

(五百旗頭) それが消防の人たちと一緒に人命救助。

(谷川) はい、消防団。

(五百旗頭) 消防団ね。

(谷川) はい。1日目はこの3チームで、救命救助に向かいました。

(五百旗頭) 3チームというのは、今おっしゃった三つのね。

(谷川) はい。建設関係と消防職員、消防団。ただ、消防は確かに、地震と同時に火事も発生してましたから、素早く、意外と早く消してくれてましたからね。火災はあんまり起こってなかったです。ですから、ほとんどが救命救助に向かってましたですね。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) それと、市民が消防のそこへ助けを求めにね。あるいは器具を借りにきたりとかいうのが来てました。で、消防の前に机を一つ置いて、受付のような格好もつくりましたけど。

(五百旗頭) ああ、なるほど。それで、その3チームに分かれて人命救助に送り出していく、その統括をなさったんですか。

(谷川) はい、そうですね。

(五百旗頭) ご自分で現場へは。

(谷川) でも、いや、私ももう。みんな出払った後に来られるんです、助けにきてくれいうてね。ほんなら、帰ってきた者と一緒に私も行きました。

(五百旗頭) ああ、そうですか。どんな状態だったですか。

(谷川) いや、もうどう言ったらいいんか、もうすごい状況ですね。でもね、私も思いましたけど、ご近所の方が非常にいろんな場面で助けに入っておられましたね。

(五百旗頭) 家族とか近所の人で助けられる、浅いのは助けられるんで。

(谷川) 浅いのは、はい。やっぱり奥の方の機材なんかも要るところは、やっぱり消防職員とか警察が来るのを待っておられますけどね、足りませんでしたわ。

(五百旗頭) 機材も足りないでしょ。

(谷川) はい。もう機材なんかも、ほとんど消防にあったんも出払ってましたし、手作業ですね、ほとんどはね。

(五百旗頭) 人手だけで、しかし、重い物動かせないでしょ。

(谷川) はい、意外とね、やっぱり、どっかから探してきた自動車のジャッキとかね、あれが意外と役に立ちましたね。

(五百旗頭) ああ、なるほど。どういう機材が必要だったですか。

(谷川) やっぱりね、どなたかやっぱりどっかから探してこられたんか、ボールとか、ジャッキとか。

(五百旗頭) ジャッキはこう、隙間をつくって。

(谷川) はい、作ってね。はい。

(五百旗頭) バールは。

(谷川) バールは、やっぱり、そういうジャッキを入れるためにね、柱を起こしたり、てこの作業でね。

(五百旗頭) てこの作業でね。

(谷川) のこぎりなんかもあったら非常に。

(五百旗頭) そうねえ。

(谷川) チェーンソーなんかは、とてもなかったですけど。

(五百旗頭) そんなハイカラなものはない。手動のこぎりですね。

(谷川) そうですね。

(五百旗頭) しかし、それでは木は何とか切れてもね、金が入っているとどうしようもない。

(谷川) まあ、ほとんど近くのあの隙間におられる方ですね。それともう一つは、もう亡くなっておられる方の搬送業務でしたね。

(五百旗頭) なるほどね。

(谷川) 建設関係職員はね。消防とか、消防団の人は何とか奥へ入って助けに入って下さってましたけど。

(五百旗頭) ええ、ああ後方で。

(谷川) 後方でやっぱり搬送業務がほとんどでした。役所、建設関係は現場用の車をたくさん持ってまして、これもほとんど屋外に置いてたんで助かりましたけどね。シャッターのある、そんな車庫に入れてたら、シャッターが潰れたりしてましたから。

(五百旗頭) なるほど。救急車ですか、それはつまり。

(谷川) そうですね、救急車の役目もしますし、ご遺体の安置場所も基本的に助役が決めてくれてたんで。

(五百旗頭) お寺に協力を頼んでくれてましたね。

(谷川) はい。でも、お寺がみんなペッシャンコになっとんで。

(五百旗頭) あららら。

(谷川) で、結果的に避難所でした。

(五百旗頭) お寺は。

(谷川) お寺はほとんど置いていません。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) 避難所の片隅か、埋め立てに新しい中学校ができたんです。ここは被害が比較的少なかったんで、この中学校がメインでしたね、ご遺体の安置場所は。もちろん、1日目はね、警察は警察で救命救助をやっておられたよう

で、それではもうばらばらだということで、2日目からは合同で。

(五百旗頭) 消防と警察。

(谷川) 消防と警察と建設関係も一緒に、それで指揮官は警察の副署長さんがやっておられました。

(五百旗頭) ああ、そうですか。組織をいいオーガナイズできたわけだ。

(谷川) はい、うまくいきましたね。

(五百旗頭) 警察の副署長さんが。

(谷川) はい、副署長さんが指揮官でした。

(五百旗頭) 消防の方、建設の方、自衛隊は芦屋には。

(谷川) 自衛隊はね、その救命救助のときにはまだ。

(五百旗頭) 間に合わなかったんでしょうね。

(谷川) はい。間に合ってなかったですね。あれはね、いつごろだったかな、意外と遅かったですよ。

(五百旗頭) ええ。

(谷川) 偵察隊みたいな人は、来てたように思いましたけどね。

(五百旗頭) そうですか。偵察隊は伊丹の36普通科連隊からね、西宮、芦屋に、その日の午前中から偵察は出してますけれど、西宮で大体とまっちゃったんじゃないですか。

(谷川) はあ、そうですかね。

(五百旗頭) 西宮が結構きつかったでしょ。大手だったから。他方は、姫路の第3特化連隊の方が神戸市の担当で、芦屋からは伊丹の担当ですね。

(谷川) ああ、伊丹でしたかね。

(五百旗頭) 伊丹の方から来てくれたのはいいけど、西宮で足りちゃったというのか、たいした兵力ないもんですからね。

(谷川) ああ、そうですね。

(五百旗頭) 芦屋は、したがって建設の方が消防、警察と一緒にという体制になったわけですか。

(谷川) はい。

(五百旗頭) なるほど。救出現場にもいらして、人命救出というふうな瞬間も立ち会われましたですか。

(谷川) はい。たくさん助け出されましたわ。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) 1日目は、やっぱり一番亡くなった方も意外と少なく、助け出された人のうち。

(五百旗頭) 生存救出ね。

(谷川) 生存者が多かったです。

(五百旗頭) ああ、そうですか。それはあれですか、建設部の人たちで。

(谷川) いやいや、私たちは、ほんの一部ですわ。

(五百旗頭) 助け出すのは。

(谷川) やっぱり市民です。

(五百旗頭) 近所の人ね。それが圧倒的ですか。

(谷川) はい、もう圧倒的です。芦屋では、後から考えても2割以上は助けてなかったん違いますかな。

(五百旗頭) 2割以上。

(谷川) 2割そこそこじゃなかったですかね。

(五百旗頭) 何が。

(谷川) 助け出した、救助隊が助けたのがね。

(五百旗頭) ああ、むしろ8割は市民。

(谷川) 市民が助け出してます。

(五百旗頭) なるほど、そうでしょうね。そうですか。もう無手勝流というか、大した装備なしですよ。

(谷川) 装備なしで。

(五百旗頭) ええ。

(谷川) で、2日目の真夜中にね、東京消防庁のレスキュー隊が80人来てくれた、芦屋に。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) あの装備を連ねて。この人たちが3日目から、あの難しいコンクリートの下とかね、入ってくれてましたわ。

(五百旗頭) ああ、そうですか。東京レスキュー隊が芦屋に80人。それはすごいですね。

(谷川) あれは芦屋に行けと言われて来られたと思いますけどね。

(五百旗頭) ええ、まあ北村市長もあちこちにお電話なさってたから、何かあったのか。消防の連絡網でしょうね。

(谷川) そうでしょうね、はい。消防から助け求められたと思いますけどね。

(五百旗頭) 組織内の連絡は、案外ね、連携よかったですから、きっと芦屋の消防の人がうまく東京の方と繋げられたんでしょうか。

(谷川) と思いますけどね。私は、あの2日目の真夜中に消防長と消防署の前で、「今、東京消防庁が来てくれるんや」と言って、消防長がどこに休んでもらったいいか、迷ってましたけどね。

(五百旗頭) お世話のね。それをみんな心配されたようですね。

(谷川) それでも、ちゃんと装備を持ってきておられましたね、さすが。

(五百旗頭) 心構えを持ってこられる人はね、おもてなしを受けるんじゃないくてね、助けるために。ただ、2日目の夜、夜じゃないと入れないからね、そうすると3日目からですね。

(谷川) はい、そうです。

(五百旗頭) そのときには、もう生存している人はかなり少ないでしょ。

(谷川) はい、もうほとんど亡くなっておられました。

(五百旗頭) 遺体救出になっちゃうんですか。惜しいですね。

- (谷川) はい。芦屋市内でも、3日目は後から見ても19人助け出してますけども、全部亡くなっておられましたわ。
- (五百旗頭) 3日目、東京レスキュー隊が19人、遺体救出をしてくれた。
- (谷川) はい、遺体救出。
- (五百旗頭) やっぱりあれでしょうね、生存で救出されるのと、遺体になってる場合では、その雰囲気というんですかね。
- (谷川) もう、全く違いますね。もう、それは、本当に地獄でしたな。1日目は、市民の方がたくさん助け出されたんで、後で分かったことですが、82人助け出されて、60人も生きておられたんですよ。
- (五百旗頭) ああ、そうですか。
- (谷川) 1日目は亡くなった人が22人ほどですよ。
- (五百旗頭) それは、芦屋市全体ですか。
- (谷川) はい、市全体の統計を見ても。
- (五百旗頭) そうですか。
- (谷川) ですから、ほとんどが、それも市民が助け出しておられたんですね。2日目になったら22人助け出してね、生きておられたのは5人しかおられなかった。
- (五百旗頭) ああ、そうですか。
- (谷川) 3日目が19人、全員だめだったと。
- (五百旗頭) ああ、なるほど、そうですか。
- (谷川) だから、やっぱり助け出すのは、勝負は1日でしたね。
- (五百旗頭) そうですね。初日にレスキュー隊がいたらね、話が違うんですね。
- (谷川) 違いますけどね。
- (五百旗頭) だから、今後の備えということになると、まさに初日からレスキュー隊ごときが機能するかどうか。それは多分、市民がその装備を持っておられるようにというのが。
- (谷川) そうですね、はい。そこが今ね、行政が一生懸命立ち上げに努力してる自主防災組織のね。
- (五百旗頭) 自主防災組織ね。これはうまくいっておりますか、話は飛びますが。
- (谷川) そうですね。あちこちで私も、実は、私の話を気に入っていただいて地方へも呼んでいただいておりますが、自主防のリーダーの研修なんかによく寄せてもらいますが。それぞれの府県は非常にこの自主防の立ち上げに努力しておられますね。
- (五百旗頭) やはり自分のところへも来るという認識は、結構、浸透してますか。
- (谷川) 結構、浸透は、してます。それと、このセンターも非常にネームバリューが上がってきましたわ、地方に。
- (五百旗頭) 大きな認識を作る上で大きいでしょうね。
- (谷川) はい、そうですね。ほんで、ここへね。
- (五百旗頭) ひと未来館へ来られてね。うちも安閑としてはいけないということをわか

られたんでしょうね。

(谷川) はい、そうです。もう地域のリーダーの皆さんが大事ですよって、私言うんです。で、皆さんが助けに入ってもらうしか、もう誰も来ませんと。

(五百旗頭) 装備も相当やってますか。

(谷川) 行政が財政的に余裕のあるところは、自主防に機材庫を設置、機材庫と今、先生がおっしゃったチェーンソーから、バール、掛矢。

(五百旗頭) 掛矢。

(谷川) 掛矢って、くいを打つ。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) 何ていうん、掛矢いいまんな、ああいう。

(五百旗頭) 木槌の。

(谷川) 木槌の大きいやつ。

(五百旗頭) ああ、そういうのが。

(谷川) ロープとかね。そこには、水とかね、カンパンも置いておられるところも。そういう機材庫をあちこち適宜、始めてます。

(五百旗頭) ああ、そうですか。それは公民館みたいな感じですか。

(谷川) いやいや、公民館の空き地に。

(五百旗頭) 横にね。

(谷川) 機材庫、防災倉庫と名前を書いて作っておられるとこ、結構あります。

(五百旗頭) ああ、そうですか、それはうれしいですね。

(谷川) はい、そうですね。

(五百旗頭) 東京レスキュー隊というのは、もっと、特別の装備を持ってるんですか。

(谷川) いや、いろいろ持って来てましたすな。一番びっくりしたんは、テレビクルーが来てましたよ、後ろに。

(五百旗頭) 何ですか、撮影。

(谷川) テレビ、東京消防庁から映すんや。

(五百旗頭) ああ、つまりコマーシャル用ですか。

(谷川) そうですね。あれ。

(五百旗頭) 記録ですね。

(谷川) 記録ですね。ほれで、1カ月後ぐらいに僕もよくビデオ見ましたけど、芦屋の消防はひとつも映ってなくて東京消防庁ばかり映ってね。

(五百旗頭) なるほど、なるほど。

(谷川) さすがでしたね。

(五百旗頭) 大活躍をアピールして。そうですか。

(谷川) 意外と皆さん小柄でしたね、あのレスキュー隊は。やっぱりああいう狭いところ入るためには、いろんな道具持ってきてはりましたですね。

(五百旗頭) なるほど。そうすると、ジャッキアップはもちろんのこと。

(谷川) チェーンソーとかね。

(五百旗頭) 今、機材置き場には、そういう物は、大体置いてるわけですか。

(谷川) はいはい。結構、それぞれ市町村が助成してね、そういうところが結構ありますね。自主防災組織を立ち上げてもらったところは、そこへ。でも、あれ、いざとなつて、いつも鍵がかかってます。「誰が鍵を持ってるねん、開けられるのかな」と思ったりしますけどね。

(五百旗頭) 泥棒に強盗に使われては困るからね、鍵つけないわけにはいかないけど、鍵かけた人がいないと。

(谷川) 大変だと。まあ、いくつも作ってるとおっしゃるところも多いですけどね。

(五百旗頭) ああ、なるほどね。
80人ほどですか、初日。そういうものをいくつかご覧になったわけですね。

(谷川) はい。いくつも見ましたね。

(五百旗頭) 住民さんたちが大体むらがつて、みんなで、ああせよ、こうしろと言いながら。

(谷川) そうそう、意外と若い子が多かったですね。

(五百旗頭) そうですね。なるほどね。

(谷川) いや、若もんが頼りになりましたね、あれ見とったら。

(五百旗頭) そうですね。

(谷川) 若もんがどうやこうやってよく言われてますけどね。いや、ああいうときは結構、ワルも頑張っていました。そうちゃいますか。

(五百旗頭) いやいや、そうですよね。何かサッカー部とかアメフト部なんかの人が、たまたまね、神戸のどっか通りかかってて大活躍したみたいだと聞いてますよね。

(谷川) 県立の芦屋高校ありますけども、ここの在校生も被害の少なかった山手の方の生徒たちは、芦高もほとんど避難所の管理から始まって。

(五百旗頭) 避難所のお世話をして。

(谷川) 最初の救命救助ももちろん、よう頑張っていましたな。

(五百旗頭) そうですね。皆さんは2、3割しか、消防、建設部とね、警察と一緒にたとおっしゃったけども、皆さんは一応装備をお持ちでしょ。ただ、数がないのか。

(谷川) いや、装備もほとんどないですね。

(五百旗頭) そうですね。最初のグループが持っていったら、もうないというか。そうするとマンパワー。

(谷川) マンパワーですね、はい。

(五百旗頭) どんな現場の状況ですか。

(谷川) いや、やっぱり木造ですからね、結構、すき間みたいな所に生き残っておられるんですわ。ですから、そのすき間を開けて、少しずつ開けて引っ張り出すと。生きておられる方はね。

(五百旗頭) やっぱり生きてれば返事をしてくれますしね。

(谷川) そうです、そうです。そやから声をかけて。ある消防職員も言うてました

けど、「声のないところは後回しにした」と言うてましたね。

(五百旗頭) そりゃそうですね、まず生きてる人を優先するほかないですからね。

(谷川) 声がしてるか、してないかと聞いてね。

(五百旗頭) 浅い所で声がすればいいけど、深い所はきついですね。

(谷川) それはきついですね。それはもうプロが来てくれるのを待たんとしてしょうがないんですけど、なかなか人数が足らなかったんで。でも、芦屋は消防団がまだありましたからね、消防団が結構活躍してくれてました。

(五百旗頭) 結構大きな組織ですか。

(谷川) 6分団あって、170人ぐらいおられたんです。消防団はね、7割、8割近く出動しておられましたわ。

(五百旗頭) ああ、そうですか。7分団、160人。

(谷川) 170人でした。

(五百旗頭) だから、消防署員はどれぐらい。

(谷川) 84名ですね。消防職員はね、1人が療休だとおっしゃってまして、全員出てきてました。さすがでしたね。芦屋市、市の職員はね、1日の夜には42%でしたわ、後から統計を見ると。

(五百旗頭) ああ、そうですか。市役所の全般ではね、みんなやられてるんですよね、自分の家が。

(谷川) はい。4人は亡くなってました。

(五百旗頭) 消防団というのは、その消防職員を助けて、市民が労力する。

(谷川) そうです、そうです。

(五百旗頭) そういうものとして、日ごろから組織してらしたわけね。

(谷川) そうです、そうです。商売人であったりね。

(五百旗頭) みんなそれぞれ仕事を持って。

(谷川) 持っておられて。

(五百旗頭) どういう活動をなさってたですか、日ごろは。

(谷川) 日ごろは、もう消火活動が消防団のメインの仕事ですよ。

(五百旗頭) ああ、それのお手伝い、市民のリーダーみたいな形で。

(谷川) 消防団員は、やっぱり、ああいう制服を着て、火事があると。消防団ごとに消防車を配置してますから。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) 消防職員と同じ形で消火に出るんですよ。

(五百旗頭) じゃあ、ついて行って一緒に協力して。

(谷川) もちろん一緒に放水してるんです。

(五百旗頭) 本格的な消防活動ですね。

(谷川) そうです、そうです。

(五百旗頭) そうすると、こういう地震が起こったというのは、やや筋違いではあるけれど。

(谷川) あるけれども、やっぱり災害ですから。

(五百旗頭) 日ごろの、あるから、これが中核になったわけですね。
(谷川) はい。これ大都市ほど、もう消防団員がいなくなってきたね。
(五百旗頭) そうそう。そうすると、消防団170人と建設部の方が。
(谷川) 40人ほどでしたね、消防職員が84人ほど。
(五百旗頭) 約二、三百人、二百何十人の方が幾つかに分かれて。
(谷川) 分かれて呼ばれたところへね。
(五百旗頭) 何人組ぐらいで、そういう場合行くんですか。
(谷川) 私たち建設関係は2人1組で出たんです。
(五百旗頭) 2人1組ですか。2人では、しかし。
(谷川) もう、ですからほとんど搬送業務みたいな格好になってきましたね。助けにというよりは。
(五百旗頭) 現場で指揮をとるというわけでもない。
(谷川) でもないですね。
(五百旗頭) それはもうやってるわけですね。
(谷川) やってます。もう既に市民がね。皆さんがもう必死にいろいろやっておられるんで。はい。
(五百旗頭) やっぱり指揮する人が市民の中でおのずと出てくるんですか。
(谷川) その場所ごとに、やっぱり指揮する人は大きな声で、ああやこうや指揮しておられましたね。
(五百旗頭) どういう人がその指揮をとるようになるんですかね。
(谷川) やっぱり声の大きい、世話好きというかね、そういう人が自然と出てきますわ。
(五百旗頭) ああ、そういうことでわね。
(谷川) ですから、皆さん会社員でもありましょしね、学生さんでもありましょし、いろんな方がね。
(五百旗頭) ああ、そうですか。西宮の甲東園では、何か電気関係の仕事をして、壁の中にどういうふうな配線するかとか、それをやってた人がえらく活躍したって話を聞きましたね。
(谷川) ああ、なるほどね。
(五百旗頭) 家の構造が分かってるとかいって。同時に声が大きく、世話好きなんでしょうけど。
(谷川) ああ、そうですね。はい。
(五百旗頭) そうというのが現れるんですか。
(谷川) そうですね、おられますね。
(五百旗頭) 若い学生さんが中心になってるっていうこともあるんですか。
(谷川) やっぱり通りがかりの人であったり、ご近所の学生さんたちであったりしますね。私は、これはよく聞いた話でしたけど、当時の商船大学の学生さんが、すごく活躍しておられたってね。
(五百旗頭) 東灘の方の。

(谷川) 東灘のね、はい。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) あの学生さんがよく、地域のね。

(五百旗頭) やっぱり彼らは、船で共同作業をしてるから、できるんでしょうね。

(谷川) はい。ほんであの東灘の深江地区は、一番倒壊家屋の多い所でしたから。あの商船大が、私の知り合いも遺体のね、安置場所に困ったんですけども、商船大に最終的に置かせてもらったと言っていましたね。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) やっぱり、その辺の、右往左往するばかりでしたでしょうね。芦屋はね、おかげさんで、こんなことを言ったらあれですが、助役がピシッと指揮をとってくれてたんで。

(五百旗頭) なかなかそれはないようですね。

(谷川) そうですね。もうあれは本当に。

(五百旗頭) はまり役のお方で。

(谷川) はい。

(五百旗頭) 彼はどうしてそういうことが、そんなにおできになったんですかね。

(谷川) そうですね。彼、事務屋さんですけどね、まあ言えば、どさ回りをしてきた助役ですわ。いわゆるね、管理部門をずっと出世してじゃないんです。

(五百旗頭) じゃなくて、現場を。

(谷川) はい。私の前任の下水処理場長でもあったんです。

(五百旗頭) ああ、なるほど。

(谷川) ですから、大雨台風、台風対応ね。事務屋さんやねんけど、そういう技術的なことが好きでね、建設関係の。ほれで、雨が降ったらどこが溢れるいうようなことも絶えず知ってましてね。もう私らにも、いつも台風の前には「あそこ見てきたか」って、よく怒られたもんですけど。

(五百旗頭) ああ、そうですか。はあ。

(谷川) 厳しかったけども、心根は優しい人でしたね。だから、あんな30分後に棺おけなんかね。

(五百旗頭) ねえ、偉いですね。

(谷川) 「棺おけを発注せえ」っちゅうようなことは、そら。

(五百旗頭) 医師会への協力とね。

(谷川) はい。私、やっぱりリーダーが大事だということで、このことをお伝えしていますねん。

(五百旗頭) じゃあ、語り部としては、どういう話をされるんですか、30分間。

(谷川) 私は、ですからまず、皆さんリーダーが多いですからね、ここへ来られる。

(五百旗頭) ああ、なるほど。

(谷川) 市役所も消防も警察も来ませんと言うて、皆さんが中心になってもらうことになりますと。で、私、出勤途上のあのすごい状況をまずお話しして、そ

して市役所に遅れたけども、リーダーの助役が朝一に四つの指示を出してくれてたと。

(五百旗頭) 四つは、その医師会と、棺おけと。

(谷川) 棺おけと、それからご遺体の安置場所とお寺にせえという、それと建設関係は救命救助に向かえという、この基本が四つ。もちろん食糧も注文してましたけど、この四つを中心に言いまして、救命救助の様子をお話しして、助け出したんはほとんど市民の皆さんだったと。私たち救助隊は、ほんの一部しか助けてなかったと。だから、市民の皆さんこそ、こんな大災害が、特に1日目、1日目に市民の皆さんの力が一番大事ですと。この初動が一番大事でしたと。で、3日間頑張っしてほしいとお願いしてます。

(五百旗頭) そうですね。

(谷川) 3日もしたら、行政も体制立て直して、必ず来ますんで。

(五百旗頭) 救援物資も食糧も。

(谷川) はい。もう間違いなしに来るんで、3日間は皆さん、その地域のリーダーとして指揮をとって欲しいということをお願いしています。その後は、やっぱり、ご遺体の管理、火葬、それから避難所の大きな問題、トイレ問題ね、この辺をお話するんです。

(五百旗頭) もうこれはライフラインと、そうですね、だんだんと要求水準も上がってくるとして。その携帯ラジオ枕元に持ってらして、それが大変よかった。でも、これは安全のためというより、生活の自分の歌としてお持ちだったんですかね。

(谷川) はい、そうです、そうです。

(五百旗頭) それが安全とかに。そのほか、市民が災害が起こったときに備えておくべき物って何でしょうかね。

(谷川) 私は、一つは、もちろん今、先生おっしゃったように携帯ラジオと懐中電灯、これを枕元に置くだけではだめでね、しっかり止めておいてくださいと、震度7になったら飛んでまう、それが一つと。それから、やっぱり家族用に最小限の水と食糧を備えておいて欲しいと。その辺と、もちろん、怪我や亡くなられたらいけませんので、家具の横なんかに寝ないようにというようになことを必ずお伝えしてますけどね。

(五百旗頭) なるほどね。私は西宮市の甲陽園でね、鈴蘭台よりもう少し激しい揺れだと思うんですけど、私の場合、その懐中電灯がなくて、家中、家捜しして真っ暗な中で見つからず、トランジスタラジオは、たまたま息子が東京へ学生で行ってしまったそのベッドにね、寝転がって触ったら、掴んだんですよ。

(谷川) ああ、そうですか。

(五百旗頭) それで、震源地は淡路島というのを聞いてね、光が見えたという。もう一つ、スリッパ。スリッパを手にするまで、廊下がグチャグチャになって濡れてるんですよ。それが自分の足が切れて血が出てるのか何かわかんないん

ですね。で、玄関まで2階から降りて行ってスリッパ履いた途端に暖かくてね、ほっとしましたですね。だから、懐中電灯とラジオとスリッパというのが、僕は意外に3点セットと思ってるんですね。

(谷川) ああ、そうですね。私は、スリッパまでは言わないんですけど、慌てずに、すぐに飛び出さずに、出る場合はシャツでも何でもいいから足に巻いて出てくださいと。そうでないとガラスがいっぱい。

(五百旗頭) 切りますよね。

(谷川) 切ったら、もうそれこそ大変なことになります。せっかく命助かったのにね、足を切っただけで大変な事態になるんでと言って、その辺もお伝えしてんですけど。

(五百旗頭) そうですね。その個人のそういうふうな心がけと、でも語り部として、各地域で中心になるリーダーに方ね、語っていただいているのは素晴らしいと思うんですけども、リーダーをやる人の心得というのは、どんなことですか。

(谷川) 私ね、心得はこうあるべきとか、そんな話、全然しません。私の体験をそのまま、ありのまま、失敗も含めて語りましてね。そのことが、皆さん、同じことをやっていただくことになる。

(五百旗頭) なるほどね。

(谷川) で、最初に、私、リーダーが一番重要なのは、私の経験としては私の助役の話をするんです。この助役のすごいね、指揮こそが非常に被災者にとって、ある意味では大きな差が出たような気がするんです。今、先生おっしゃったように、4つの助役が指示をしてくれたと。こういう落ちついた指揮を、やっぱりとって欲しいと。そういう話をまずしまして、で、私の体験は救命救助、これはもう市民の力が一番大きかったということをお話しします。その次に、やっぱりご遺体でしたわ。ご遺体の管理と火葬ね、火葬に困りました。これは行政がやる話ですけども。でも地域のリーダーとして、亡くなった人がたくさん出たら、やっぱり管理もしていただかなければなりませんし、それと温かい全国の皆さんの救援物資がどっと届くんですね。この救援物資対応でも、私たち大失敗しましたね。

(五百旗頭) ああ、そうですね。という。

(谷川) 初めての経験でしたけど、この救援物資をどこに集積、保管するか。これが最初大事でしたわ。私たち市役所の地下の2階、3階が駐車場だったんですね。雨露に濡れてもいけませんし、そんな所もなかったんで地下の駐車場にしたんです。これが失敗でした。

(五百旗頭) ああ、そうですね。

(谷川) 大きなトラックで続々と届くんですね。それを地下まで別の車に積み替えて運んで。

(五百旗頭) ああ、手間が。

(谷川) ほんで、そこからまた避難所に送る。これが手間かかりましたわ。それ

で、最初、職員、私たち救命救助に向かったけれども、残りの職員は全員がこれでした。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) 救援物資対応ばかり。

(五百旗頭) ありがたいような迷惑な。

(谷川) はあ。ですから、避難所の管理なんか、職員ほとんど派遣できてない。

(五百旗頭) 行けない。これはボランティアですか。

(谷川) ほとんど、ボランティアです、はい。ただ、図書館とか体育館は、もともとそこに職員が張りついてますね。そこに張りついてた職員は、自分の職場としてそこへ出よったんですよ。出勤しよったもんですから、ほんでそのまま被災者対応してくれてました。

(五百旗頭) 地下はよくなかったとしたら、どこだったらよかったんですか。

(谷川) それで途中から変えたんですが、ちょっと市役所から離れましたが、高等学校の大きなグラウンドにテントを張って、そこに場所を変えてからは非常にスムーズにいきました。やっぱりトラックが横づけできなかった。

(五百旗頭) ああ、大変ですよ。

(谷川) 物すごく来るんですよ、ありがたい話ですが。それはもうすごい量。日本人の温かさを思い知った感じでしたけど。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) でも、あまりの量でした。

(五百旗頭) ああ、そうですか。むしろ余っちゃって。

(谷川) はい、後はね。

(五百旗頭) 処理し切れないぐらいいただいた。

(谷川) でも、3日ぐらいは少ない職員で対応してましたけどね、限界でしたけども。このときでしたわ、ボランティアの皆さんが来てくださって。

(五百旗頭) ボランティアの人は、気持ちはあるけれども、システム化されてないんじゃないですか。

(谷川) そうですね。でもね、あれも初めてでしたけども、あの当時、最初に来てくれたんは学生さんでしたわ。彼らは組織は素早く作ってくれましたで。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) うまく作ってました。それと行政側が、後方支援はしましたけども、口出しはしなかったです、芦屋は。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) それがかえってよかったようでした。

(五百旗頭) 彼らが自分でやった。

(谷川) 全く任せて。

(五百旗頭) 学生さん。

(谷川) はい。学生さんが主体で。

(五百旗頭) 芦屋には、そんなに大学はないと思うけど。

(谷川) ないんですけども、やっぱりあちこちから、それなりにね。

(五百旗頭) そうですか。

(谷川) ですから、動き出したん、やっぱり3日後ぐらいでしたけどね。

(五百旗頭) ああ、なるほどね。

(谷川) うまく組織を立ち上げてましたで。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) さすがやと思いましたね。

(五百旗頭) 任せたらいいんですね、意外に。

(谷川) そうです、そうです。それでね、後でやっぱり芦屋がボランティアと行政が協調型でうまくいったといって何か評価されてたようですけども、逆に口出ししなかったのがよかった。

(五百旗頭) ああ、なるほどね。仕切らなきゃいかんと思って、ああだこうだと言うと。

(谷川) そうです、そうです。もう最初でもね、よそで聞いた話でしたけど、救援物資が届いても、「被災者に公平に当たるまで配るな」言うて行政がボランティアに指揮をするんですって。それに若い学生が憤慨してましたけど。「来たもんから何で」って。

(五百旗頭) そうですよね。

(谷川) 「あとは分けるのはみんなに任しゃええのに」って。ほんまそやから、役人の公平公正を旨とするというのは、滑稽というのか。

(五百旗頭) 叩かれたらいかんとかね。

(谷川) そうですね。

(五百旗頭) そういうことを言ったら、緊急時は間に合わないですね。

(谷川) 間に合いませんね。

(五百旗頭) そうですか。お任せになった成功ですね。

(谷川) ですから、私たちも救命救助に向かってましたけど、夜なんかはね、救援物資に、手伝ってました。そうしないと、とても足りませんから。最後の方は市長も地下へ降りてきて当たってましたよ、見かねて。

(五百旗頭) ああ、そうですか、そんなに。そういうボランティアなしには、とても。

(谷川) もう、とてもとても。もう、ボランティアあって、本当に今日の復旧・復興ありますわ。こんなありがたかったこと、なかったですね。

(五百旗頭) そうですか。私のゼミ生たちもみんな合宿みたいにしてね。

(谷川) そうですね。

(五百旗頭) 3カ月活動していたようですけれども、芦屋の場合そういうのが、やっぱりかみ合ったんですね。

(谷川) かみ合いましたね。

(五百旗頭) その管理する人とボランティアの間のギャップみたいなのは、よく聞きますね。

(谷川) そうですね。はい。

(五百旗頭) ボランティア側からすると、どうしてあんな馬鹿なことをやってるんだろうとかね。

(谷川) そうですね。

(五百旗頭) 芦屋は、別に、そこをうまく任せることに。

(谷川) そんな感じでしたね。で、自治体職員もたくさん来てくれてたので、それはそれで別で受付してましたわ、芦屋の場合。

(五百旗頭) よその自治体から応援が。

(谷川) はい、応援が。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) そこは人事課がまとめてましたね。

(五百旗頭) それはどういう分野の仕事を。

(谷川) やっぱり、もう、それぞれ同じ仕事をしてた仲間ですから、もうほとんど1を言えば10知ってくれてますんで。

(五百旗頭) ああ、なるほど。

(谷川) それぞれの部署へ行ってくれて。すごいのは、電話の対応まで来てくれて、苦情の対応もしてくれる。

(五百旗頭) どのあたりから来てくれてたんですか。

(谷川) やっぱりね、最初あれ兵庫県が招集されたんか、県内の奥の方からがたくさん、まず来てくれてましたし、大阪府下、やっぱり近畿圏から早かったですね。

(五百旗頭) ああ、なるほど。そうですか。

(谷川) さすが水道と消防は、一家言われてるだけ早かったですね。水道と消防が、もういろんな自治体から1日目から来てました。

(五百旗頭) そうですか。水道はなかなか再建しなかったでしょ。

(谷川) はい。復旧は遅れたんですけども、タンク車でたくさん。

(五百旗頭) あ、とりあえず水の。

(谷川) はい。タンク車で来てくれまして。

(五百旗頭) はいはい、なるほどね。

(谷川) それから、ペットボトルがもうね、あのころは普及してましたんで。

(五百旗頭) 市民に配ってくれたわけですね。

(谷川) はい。それから、一部水が出るところを、早く道路上から立ち上げて、そういう場所をいっぱいつくりました。

(五百旗頭) 水道水が出てくる場所を作って。

(谷川) はい。

(五百旗頭) そうですか。

(谷川) 道路上に立ち上げました。

(五百旗頭) そんなことできるんですか。

(谷川) はいはい。

(五百旗頭) 何カ所も。

(谷川) はい、何カ所も。

(五百旗頭) それは大きいですね。

(谷川) はい。そこへ汲みに来てもらえますからね。それでないのは、自衛隊とかね、タンク車で来てくれて。

(五百旗頭) 自衛隊もだいたい遅れてやって来て、ライフライン段階では。

(谷川) いや、もうそれよりあれですよ。私、落ち着いて3日間ぐらいで救命救助はだいたい、建設関係はちょっと切り上げて、あれだけ潰れた家屋の解体撤去をやらないかん。これも助役が「おまえやれ」っちゅうんで、一言。

(五百旗頭) ああ、そうですか。建設部長だったから。

(谷川) いや、もう平素やったら、これはどこの部署でやるかいうて議論沸騰するところでね。私、もうこれ大ヒットやと思ったんが、1週間目にはね、国が敷地内の潰れた家屋も、解体を公費で見えやろうと。

(五百旗頭) そうですね。あれ大きい。

(谷川) あれが大きかったです。

(五百旗頭) そうですね。

(谷川) あれがなかったら、これはいつになったら片づくかと思いました、最初はね。だから、もう潰れた家は全部、公費解体となったから「おまえとこやれ」っちゅうて、やったってくれっちゅうて言われるから。

(五百旗頭) じゃあ、建設部長さんのお仕事になって。

(谷川) まず、それ。

(五百旗頭) これは、しかし、自前ではできないから、どこの力を借りるんですか。

(谷川) もちろん最初は、それぞれ家屋の撤去費をね、実は個人個人の撤去費用を積算せないかんのですよ。それをどうするかというのが一番大きな最初の問題でしてね。木造の家屋1平米当たり、潰すのにいくらかかるかということだけ計算させて、1軒のお家でどれくらいかかるということを計算しまして、それをその額を市と個人と業者と3者契約して解体させたんです、業者にね。市直営もやりましたよ。でも、それだけでは到底追いつかへんので、もう個人と業者と契約してもよろしいと。支払いは市がすると。そのかわり額はこれだけですと。そやから、あなたのお家の総床延べ面積、台帳がありますから、固定資産の台帳がありますから、それ掛ける単価を掛けて、あなたの家の撤去費用はこれだけですということを決めて、そして解体に入る。

(五百旗頭) だいたい、決まるまでにかかるでしょ。

(谷川) そうですね。それでも、もう31日には募集を始めました、1月の。

(五百旗頭) 月末ね。

(谷川) はい。それで受付を始めた。だから単価を決めたんも芦屋が一番先でしたわ。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) その横並びで神戸も同じ単価出しました。

(五百旗頭) ああ、そうですか。リードしたわけですね。

(谷川) そうしないと、もう解体屋さんも入り出してね、個人にいくらで解体したるというような家が出だして、ちょっとややこしくなりかけましたしね。それやこれやで。

(五百旗頭) そうですか。

(谷川) このときに、もう自衛隊来てくれてたんです。

(五百旗頭) 月末ですか。ああ、そりゃそうでしょう。

(谷川) もっと早くですけどね。1週間後には、もう来ておられましたか。

(五百旗頭) ええ。で、これはあれですか、ローラー作戦とか、家を掘り起こすような、そういうのに加わって。

(谷川) はい、そうです。

(五百旗頭) あれは何ですか、業者。ローラー作戦というのは、警察と消防と自衛隊ですか。

(谷川) そうですね、はい。

(五百旗頭) まだ遺体があるかもしれないという所を。

(谷川) いえ、それはないです。もう芦屋の場合は、行方不明者、最後は一人だけになって、それも見つかりましたから。

(五百旗頭) 400人ぐらいだったですね。

(谷川) ええ、430人ぐらいでした。

(五百旗頭) あれ、すごいと思うのは、後藤助役が30分、1時間のうちに犠牲は100人になるだろうからって、棺おけ100注文してね。それは間違ってたわけだけれども、そういう想定をしたから、お昼ごろにはもう400というふうにね、つかんでるんですよ。

(谷川) そうですね。

(五百旗頭) すごいですね。

(谷川) すごいです。

(五百旗頭) それは100も革命的であつたかもしれないですけど、それでも全然足りないというので、400だつていうのを掘んじゃったわけですよ。

(谷川) そうですね、はい。

(五百旗頭) すごいですし、家屋のそういう撤去の方もリードされて。

(谷川) それともう一つ、被災者への応急仮設住宅のね。

(五百旗頭) 応急仮設、これも早かったんですか。

(谷川) 戸数決定は、これも助役が。これ、県が基本的に建設することになってますから、戸数を何戸にするかというのが非常に大きな問題だったようですね。

(五百旗頭) なるほどね。

(谷川) これはもう助役と県、副知事との間で、がんがんやっておられて。

(五百旗頭) 芦尾さんですか。

(谷川) そうですね、今井さんとおっしゃったかな、よく聞いたんは。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) だから、最終的には芦屋みたいな小さいところで3,000戸でしたよね。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) これをもう、あらゆる公共施設を公共用地を潰して建てに入ったんです。これも私の一つ仕事でしたけども、住宅課の人間そのまま残して、助役直属ぐらいにしてもらって用意をさせましたですね。

(五百旗頭) 撤去作業は業者。

(谷川) はい、業者と自衛隊。

(五百旗頭) 自衛隊も壊すのは。

(谷川) 壊して運んでくれました。

(五百旗頭) 運んでくれるんですか、ああ、なるほど。じゃあ、自衛隊はライフラインとローラー作戦というのは、もうちょっと早い段階で救出があって、そして撤去の仕事があって、ライフラインですかね。

(谷川) はい。ライフライン。それから、芦屋の場合はね、隊長さんがいい人でね。

(五百旗頭) ああ、そうですか。あれは伊丹から来た人ですか、もっと遠くから。

(谷川) 遠くからだったと。豊橋。

(五百旗頭) 豊橋の人。ほう。

(谷川) この方が自衛隊員らしからぬ、おもしろい人だったです。

(五百旗頭) おもしろい人、どういうふうですか。

(谷川) 何っちゅう人だったかな。

(五百旗頭) おもしろいというのは、どういう意味ですか。

(谷川) 優しくて、規則に縛られる人が多かったですけど、あんまり。

(五百旗頭) 規則に縛られず、柔軟で。

(谷川) はい。柔軟に対応して下さいましたね。この方が助役の横にぴったりおられました。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) 助役室の横に机一つ置いてね。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) お風呂とかね、自衛隊のお風呂。これは喜ばれましたわ。

(五百旗頭) 何か五右衛門ぶろみたいなんじゃないんですか。

(谷川) いやいや、大きなテント式の。

(五百旗頭) テント式の浴槽。

(谷川) テント張って、大きな。僕ら職員は入れなかったですけどね。

(五百旗頭) 市民優先ですか。

(谷川) 市民優先やし、当然。

(五百旗頭) 皆さん、泥まみれでしょう。

ほかに失敗の思い出ありますか。芦屋市は、大変成功例。

(谷川) いえいえ。失敗ね。救援物資の場所、その辺を失敗したのと。それと大きな問題は、避難所のトイレ問題でした。これはすさまじい状況になったん

で、どうするかって、もう放っとけなかったもので、水道出ないのでね。便器もめちゃくちゃになって。これも助役があれでしたわ、「仮設トイレを発注せえ」って、「頼め」っちゅうて、これも建設へやらせて。助役すぐうちへ言うてくるから。まあ、外向きに仕事する人間が多かったから、外へ出てする仕事が多い部署ですから。これ、いろいろなところをお願いして、業者とか、県にもお願いして仮設トイレを持って来てもらって設置しました。でも、すぐ便槽あふれかえる、いっぱいになる。どうするかと。ほんならもう汲み取ろうということに決めたんやけど、汲み取るバキュームカーが1台もなかった。これもまたいろいろ手づるを頼って、芦屋で最終的に1,000個ほど仮設トイレ設置しました。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川三郎) それでバキュームカーと運転手さん、いろんなところから来てもらいました。それで、汲み取りを始めました。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) ほな、汲み取ってきたし尿を、またどこで処理するかと。

(五百旗頭) 本当ですよ。

(谷川) これは下水処理場が芦屋の場合、1カ所ありまして、3日目ぐらいに動き出しましたんで、ここで処理しましたけど。このトイレ対応が大事ですよということを、これも私いつも申し上げてます。というのがね、震災起こった後ですね、新しい防災計画つくるに当たって、被災された方にアンケート調査をしたんです。そのアンケート調査で「1番困ったことは何ですか」と聞いたんですね。第1位がトイレ用水だったんです。トイレを流す水。第2位が、やっぱり水と食糧とおっしゃってまして、第3位が電話の不通とおっしゃってます。これも、いつも、申し上げてるんです。それで、トイレ問題が非常に被災者を苦しめたということで、これは特に行政が考える話ですけども、避難所のトイレ対応をしっかりと考えとかなと、最初に大きな問題になりますよと言ってお伝えしてます。最近では、やっぱり東京なんかもそうですが、広域避難所には下水管引っ張ってきてね、小さな開所をいくつもつくって、それをいざというときに開けて、囲いだけを用意しておいて。

(五百旗頭) なるほど、直接。

(谷川) 直接する。はい。そういうことをやっておられる。

(五百旗頭) そんなことまでやってますか。

(谷川) はい。

(五百旗頭) 東京も、やはり相当進んでるんですかね。

(谷川) そうですね。このトイレ問題は、本当に真剣に結構考えて。逆に市民がね、仮設トイレというか、折り畳みのをね、買って帰られる人とか結構ありますよ。

(五百旗頭) そういう物があるんですか。

(谷川) はい。ここにも売ってるんです。

- (五百旗頭) ああ、そうですか。それは何ですか、場所。
- (谷川) そう。女性なんかはね、ちょっと折り畳んで何か使える。
- (五百旗頭) でも、あと何か少し壺にでも入れとくんですか。
- (谷川) そうでしょうね。後、そこまでちょっと。
- (五百旗頭) やるときは囲われるけども、あと放ったらかしではちょっと。
- (谷川) それは、具合悪いですね。
- (五百旗頭) そうですか。
- こういう事態が起こりますと、いかに芦屋のように市がよくしていてもね、やはり人智を超える災害だから、誰を恨むことはできないんだけど、手の届かないところがあってね、市民の方にとってはフラストレーションたまると思うんですけど、そういう市民の要請とか、それへの対応というのは、どういうふうになさったですか。
- (谷川) そうですね、私らはあんまりね、直接行ってないせいもありますけども、毎日、市役所にもいっぱいおられますからね。あまりガンガンガン言われた経験はないですけどね。
- (五百旗頭) ないですか。
- (谷川) 芦屋はね。
- (五百旗頭) やっぱり理解があったんですかね。
- (谷川) あったんと、やっぱりお世話してくれてる方が素早く対応して下さった感じしますね。先ほど言いましたように、芦高なんか、もう学生が主体でずっと面倒見てましたし。比較的被害の少なかった山手の方はね、小学校それぞれにグラウンドを使っていろんな運動をされるグループがいっぱいありますね。それをコミスクールといって、それを組織化してたんですよ。そういう人たちがすぐに学校の避難所を管理して下さってました。
- (五百旗頭) ああ、そうですか。
- (谷川) 逆に、行政職員は余り行ってなかったですね。
- (五百旗頭) 手が回らないですね。
- (谷川) はい。少し落ちついてからは、応援に来てくださった自治体の人たちが避難所によく行って下さってました。
- (五百旗頭) ああ、なるほど。そうですか。
- (谷川) あんまりそんなに大きなもめごとといいますか、フラストレーションを聞くというようなことは余りなかったですね。僕らは毎日、解体なんか行って、自衛隊さんは朝早いんでね、7時には来られるんですよ。ほんなら建設課と一緒に並んで点呼をとって出て行って自衛隊さんと一緒に、ほいで真っ暗になって帰ってきますね。で、私らは市役所に帰ってきて報告がある場合は、被災されてる皆さんの前を通過して行くんですけど、もうだいたい後半になってきたら、ご苦労さんいうて拍手してもらえたからね。
- (五百旗頭) そうですか。
- (谷川) もう、結構、信頼関係ありましたね。

- (五百旗頭) ああ、そうですか。初日の生きて救出とか、亡くなっているとか、そういうところで印象に残る体験というのはございましたか。
- (谷川) やっぱり、私はもう、何ととっても一番先に早く市役所に職員が来ることでしたな。
- (五百旗頭) ああ、そうですか。
- (谷川) もう、これに尽きますわ。それが遅れたら、もう駄目ですわ。もちろん指揮官はしっかりしてね、職員が素早い初動対応。
- (五百旗頭) 何か来ても何していいか、わからないみたいなね、話を割と神戸あたりで聞きましたけど。
- (谷川) そんな感じ、あるでしょうね。
- (五百旗頭) 芦屋の場合には助役が。
- (谷川) いやもう、助役がもうすごく気のつく人ですからね。もう「あれとあれとあれはどうやっちゅう」ようなことをすぐ気づく人ですから、素早く来たもんからつかまえて、こうやれと。
- (五百旗頭) なるほど。それだけに来ることに価値がありますね。
- (谷川) はい、そうです。だから、ここが大きかったということをお伝えしてます、私は。
- (五百旗頭) なるほどね。普通は合議して会議して、そんなことをやってたら、もう間に合わない。
- (谷川) はい。私も本来だったら災害対策本部員ですからね、災害対策本部開かれたら、災対本部でドーンと座って合議をするもんですけど、そんなん1回もしてません。
- (五百旗頭) そうですか。
- (谷川) 初めて何か招集かかったのが真夜中だったんですけど、あれ1週間後ぐらいじゃなかったですかね。
- (五百旗頭) そうですか。
- (谷川) 各部の報告会みたいな。部言うたって、マニュアル潰れてますけども、それぞれ言われた仕事の報告でしたね。
- (五百旗頭) 情報を共有しながらいけなくなりますからね。
- (谷川) そうです。それで助役室で、こういうところへ。本来は協議室があったんですが、そんなところはもう苦情の電話対応班になってましたから使えないんで、助役のこういう部屋で車座になって座って、市長と助役がおって、それぞれ報告したん覚えてますね。それが1週間後ぐらいだったですかね。
- (五百旗頭) ああ、そうですか。
- (谷川) 建設部は、特に機転の利く若いのを一人、助役の近所に一人置かせといて、「助役の命令はおまえ聞いてすぐ持ってこい」っちゅう格好の連絡方法にしましたですね。
- (五百旗頭) 芦屋は、かなり例外的な成功例のようですね。
- (谷川) あれ、助役おらなかつたら、もう右往左往していたでしょう。

(五百旗頭) 何か聞くことないですか。

(村上) 救助活動ですね。木造家屋のすき間を見つけて、そこから入っていかないといけない。レスキュー隊であれば、そういうノウハウとかって分かんと思うんです、機材も持っていますし。でも我々ってそういう経験も知識もない中をですね。最初、声が聞こえますよね、どういうふうにして救助活動を。

(谷川) そら、もう皆さん、知恵絞って、何やかんや言いもって、危ない柱なんかはね、支えをつくったりしながら、ゆっくりと。そやから先生おっしゃったとおりですわ。近くの人しか助け出せなかったですわ。奥の人はちょっと無理でしたよ。それは救助隊、専門家が来るのを待つしかしようがなかったですけどね。でも、皆さんいざとなったら知恵が働くん違いますかね。うまく入って助けてましたで。人間はすごいわ、いざとなったら。

(五百旗頭) そうでしょうね。

(谷川) 優しいわ、日本人は。もうあんなにありがたかったのは。それと、市長はね、ちょっと聞いておられるか分かりませんが、ご主人が大怪我をされたんで、ちょっと遅れてこられたけど、必死に助けを求めてましたわね、他府県へね。奈良県の御所市長さんに電話がかかって、それで芦屋の被災者におにぎりを送ってくれということを頼まれてると。すぐ、もう翌日からどんどん来ました、奈良県からね。で、もう奈良県からだけでないんですね、全国から続々届くようになって、救援物資対応に失敗しましたけどね。でも、あのときはもうありがたかったですね。もう、本当に地震なんか来るというようなことを想定してないから、何の備蓄もなかったですもん。一から探すことになったんですけど、あれは毎日5万個、6万個と来ました。

(五百旗頭) 余ったのを処理に困ったんじゃないですか。

(谷川) そうです、そうです。もう最初はありがたがっていただいたけども、住民さんもそのうちにね、「もっとこんな冷たいおにぎり以外に、もっと温かいもんないんか」とか。たくさん残ってきましたよ。もう処分に往生しますね。

(五百旗頭) 冬場だからまだね。

(谷川) まだよかったですね。でも、腐りかけてるのも、たくさんありましたね。

(五百旗頭) そういうのを市民は工夫してやって、深いところにあるのというのは、東京消防庁のレスキュー隊が3日目に来た。

(谷川) 2日目でした。

(五百旗頭) 2日目ですか。警察、消防自体にも、ある程度もちろんあるわけですよな。

(谷川) はい。警察は、もう機動隊が2日目ぐらいから入って来てくれました。機動隊員がおりましたからね。

(五百旗頭) ええ、東京からですか。

(谷川) 東京消防庁。芦屋消防と消防団。こういうプロが、ちょっと難しい所はね、入ってくれました。

(五百旗頭) こういうのは装備を持って、深い所の。
(谷川) そやけど、装備といったって、そんなになかったように思いますけどね。
(五百旗頭) クレーン車を持って来るわけじゃない。
(谷川) ないですからね。あの鉄筋コンクリ、1週間後ぐらいまでかかったような場面も1つ2つありましたけどね。
(五百旗頭) 鉄筋の建物が。
(谷川) これは、もうやっぱりクレーン車が来たりとか。
(五百旗頭) 座屈というやつね。
(谷川) それは本当、東京消防庁とか、ああいうブレーカーも要りますしね。これは難しかった。
(五百旗頭) ほとんどは2階建ての1階が潰れて2階が乗っかってるという感じですね。
(谷川) はい、そうです。2階はそのままですね、ほとんどが。
(五百旗頭) そうすると、深いと言っても、2階の乗っかってる1階にいる人たち。
(谷川) そうです、そうです、はい。
(五百旗頭) だから、千変万化で乗っかられ方がいろいろだから、即死してしまう梁が頭に当たった人はそのまま死んでいるけれども、意外にすき間ってできるものなんですね。木造は。
(谷川) できるものですね、木造はね。家具と家具とのね、間にこう。だから、ほとんど木造家屋でしたからね。
(五百旗頭) やっぱり早く助け出されない人は、だんだんと声が聞こえなくなるものですか、助けようと思っても。
(谷川) ご本人がおっしゃってる人おられますね。あの、本人がね、だんだんだんだん声が出なくなるっちゅうて。
(五百旗頭) ああ、助け出された。
(谷川) 人が。
(五百旗頭) 経験者がね。
(谷川) はい。このまま死ぬのかなと思うときが何度もあったとおっしゃってましたね。
(五百旗頭) ああ、なるほどね。
(谷川) それとやっぱり、潰れた家に、ここに誰がいるのかということを知ってる人が近くにおるかおらないかで、物すごい違いましたね。
(五百旗頭) そうですね。
(谷川) 都市部はそれがなかったからね。それがあの学生さんですわ、亡くなった人で、つらかったのはね。学生さん。意外と学生アパートが芦屋にもありましてね。ここで亡くなってる人も。
(五百旗頭) いるかいもないかも、よう分からんと。
(谷川) ようわからなかったからね。
(五百旗頭) ああ、そっか。

- (谷川) 学生同士でね、ここにおるといようなことを言ってくれてるとこは、もちろん彼らも入ってやってくれてたけど。だから、そういう平素からの情報をしっかり分かってもらうことが大事でしたね。
- (五百旗頭) その辺は、田舎の方がいいみたいですね。
- (谷川) はい、田舎の方がいいです。
- (五百旗頭) 北淡町なんかはね、ここにおばあちゃん寝てるって。
- (谷川) そうそうそう。ここにも映像が1つあるんですけどね、消防団の副団長さんがおっしゃってます。どこにお休みになってるか知ってるって。それで屋根がわらやぶって行ったっておっしゃってますからね。あれぐらいやっぱりリーダーがしっかり。そのお話もするんです。
- (五百旗頭) ああ、そうですか。
- (谷川) こういうふうにはリーダーがしっかりと地域を見て下さってるるところほど、たくさん助け出されてましたよという。
- (五百旗頭) 返事の声は出ないけれども、どこの位置に寝てるか分かってれば助けられるわけですね。
- (谷川) そうです。助けに入れますね。で、やっぱり勝負は1日やったということを上申していますね。もう1日目ですわ。
- (五百旗頭) コミュニティーというのがね。
- (谷川) そうですね。コミュニティー。
- (五百旗頭) 都市化の中で、ある意味でコミュニティーを捨ててきた歴史ですよ。
- (谷川) そうですね。
- (五百旗頭) 「それが自由でいいんだ、隣は何をする人ぞでいいんだ、気楽で」と思っていたけれども、こういうことが起こると、やっぱりコミュニティーというのが必要だっていうことですよ。
- (澤田) 浅いとか深いとかいう言い方を、よくされるんですか。
- (五百旗頭) どうでしょうか。
- (谷川) いや、浅いとか、近くか遠くか。
- (澤田) 意味は分かるんですが。本部長もおっしゃったから。
- (五百旗頭) 何ていうか、重い物が塞いでいるとかね、それから上に折り重なって行けないようなのを深いと言ったんですけれども、あまり言わないですかね、浅い深いとは。考えてみたら、みんな1階で、日本の場合、地下にいるわけじゃないですね。
- (澤田) ああいう木造家屋が多いと、かえって、まだじゃあ救いがあるんですね。
- (谷川) 私、そう思いますわ。
- (澤田) 今、聞いて思いましたね。
- (谷川) あの鉄筋コンクリート潰れたら、もうほとんどだめですね。
- (五百旗頭) まあ、滅多に潰れないでしょ。マンションで潰れたのもありますか。
- (谷川) ありました。あったんですよ、はい。
- (五百旗頭) 座屈というやつですね。

- (谷川) 座屈です、はい。それで、まだちょっとすき間がありまして、それを東京消防庁は本当にやってくれてましたわ。
- (五百旗頭) それから、プレハブツーバイフォーが一番潰れない、軽くて。結果的にはね、やって分かったことは。で、時に鉄筋も座屈があって、潰れたらもうおしまいと。だけど、まあ数が減多にない。木造2階建てがね、やはり一番たくさん壊れてたんですね。
- (澤田) 壊れましたね。
- (谷川) それともう一つは、あれだけペッシャンコになったら、火災が発生しませんね。
- (五百旗頭) どうしてですかね。
- (谷川) 燃えない。空気が入らないから燃えない。学者がそない言いましたで、学者の先生が。
- (五百旗頭) ええ、空気はあると思いますけどね。
- (谷川) だけどね、木造のあのペッシャンコで、火災は僕もあんまり見ませんでしたで。
- (五百旗頭) 電気を通したときに燃えたというのが割りとあるんでしょ。芦屋は火事少なかった。
- (谷川) 少なかった。最初に火事があったままですよ。後で通電して、3日目には通電しまして。3日目には電気、これはありがたかったですね、明るかったのが。通電で火災というのはなかった。
- (五百旗頭) すぐ、地震の後、間もなくね、通電したところがあるんですね。そこが火事になったんですね。ぐしゃぐしゃになってるところで。
- (谷川) 私はちょっとよく分かりませんが、長田か何かのすごい燃えてるのは、たいがい、家が建ち残ってますよね、あれ。建ち残った。
- (澤田) 長田は余り潰れてなかったですね。
- (谷川) ね。建ち残った家が、あれ朝早く火を使ってて、燃えて、あれだけゴート燃えたように思うんですけど。
- (五百旗頭) ペッシャンコになったら。
- (谷川) で、燃えてるのは余り見かけませんよ、テレビで見ても。
- (五百旗頭) そういうもんですかね。おもしろいですね。
- (谷川) 学者さん、そんなこと、先生そうおっしゃって。
- (五百旗頭) 空気がないなんていうのは。
- (谷川) 空気がないかどうか知りませんが、実際ね。芦屋の職場のビデオあるんですけどね、あれ見てもらっても、あれだけペッシャンコになってたら。
- (五百旗頭) ああ、そうですか。見事にペッシャンコに。
- (谷川) ペッシャンコになってますね。もう東灘、芦屋のあの辺、一番ひどかったですね。
- (澤田) 昔の江戸時代の火消しなんかは、たしか家を潰していきますよね、延焼しないように。

(五百旗頭) それもやはりね、空気というか。釜戸になっちゃうからね。つぶすことによって、火消しはそうですね。今の山林火災でもね。それは分かるけれども、火の起こしてない時間でよかったですね。

(谷川) それがありますね。はい、そうですね。

(五百旗頭) 下からでも燃え始めると。

(谷川) 私はやっぱりあれでしたね、家族の安否がしっかり確認できたんと、息子たち帰ってくれて生きておって、あの日、家を飛び出してから2カ月間、一度も帰れませんでした。

(五百旗頭) ご苦労さまでした。

(谷川) いやいや、もう帰るに帰れない、電車がない、動いてないんで。

(五百旗頭) いや、もう、みんなそうでしょ。ほとんどの方ね。

(谷川) もうほとんどね、近くに住んでるもん以外は、ほとんど帰ってる間がなかったですね。

(五百旗頭) 特に責任ある人とはね。

(谷川) 何かね、今から考えても、何かすごいハイテンションで疲れたという感じは全然してませんね、今でも。

(五百旗頭) 疲れ意識しないものですか、そこまで行くと。

(谷川) もう、全職員が、もうハイテンションでしたね。

(五百旗頭) ええ、そうですか。

(谷川) 助役が何ぼむちゃ言うてきても、みんな、やろうっちゅうてやってくれたもんね。

(五百旗頭) 火事場の馬鹿力と言うけど、2カ月続くもんですね。

(谷川) 続くもんですね。で、マスコミはたくさん来てましたね。

(五百旗頭) ええ、世界中が見てますからね。

(谷川) それと、マスコミの人たちとも仲ようになったけど、やっぱりこっちからしょっちゅう記者会見をしてね、情報を提供するということが大事でしたね。

(五百旗頭) ああ、そういうのなさってたですか。

(谷川) はい。もう芦屋は1日に3回でも4回でも。

(五百旗頭) そうですか。

(谷川) 案の定、記者さんと仲ようになった。

(五百旗頭) ああ、そうですか。それは、どなたがご担当でしたか。

(谷川) それぞれの部署が、建設のこと、はい。

(五百旗頭) 助役なんかもなさってたんですか。

(谷川) 助役もやってましたね。

(五百旗頭) 広報担当とかいうのは。

(谷川) 広報担当いうのはね、最初おったけども、「こいつはあかん」いうて助役が替えよりました。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

- (谷川) もっと気が利くの持ってきて、それでやらせてましたよ。それで、広報紙も毎日のように書いて、避難所に配ったりしましたけど、なかなか徹底しない。でも、もうあれ2日目、3日目ぐらいには、もう新聞が避難所に何100部と置いてくれてたんで、それを探り読んでおられたんで、やっぱりマスコミに書いてもらうことが早かったですわ。
- (五百旗頭) そら、そうですね。
- (谷川) だから、もう次から次、いろんな施策をやっていかないかんからね、記者会見して、やりましたわ。
- (五百旗頭) そうですね。いや、本当にあの大変なときに現場でいい仕事をしていただいて、またその経験を成功と失敗を含めて社会に広く語っていただいているのは、これは広報の仕事は今もしていただいてね。
- (谷川) いや、だから、今日もよほど着ようかと思ってんけど、語り部の制服を着て、どこ行ってもあれを着て、センターの語り部としてお話して。ところが、意外や意外、もう澤田さんもお存知ですけど、私えらい人気で、引っ張りダコになってますねん。
- (五百旗頭) そうですね。いや、うれしいことですね。ぜひ。
- (谷川) それで、私の体験談がね、地元のリーダーにとって同じことをやってもらうことになるというてお話しするんで。
- (五百旗頭) それはビデオなんかに撮ってらっしゃるでしょ、30分は。
- (谷川) はい、撮ってるのもあります。
- (五百旗頭) そういうのを、ぜひ全国あちこちに回していただいて、直接聞ける人はいいですけども、いろんな自治体で、あのときの参考になると思いますし。
- (谷川) やっぱり自治体の行政職員の研修にもよく呼ばれますんでね。
でもね、今、市民の方が熱心ですわ。もう市役所の職員の方が何やぼんやりしてまっせ。市民の方が目が輝いてるね。
- (五百旗頭) ああ、そうですね。そういう市民、結構おられますか。
- (谷川) 増えましたね。
- (五百旗頭) 次なる防災に備えて。
- (谷川) もう、やっぱり太平洋沿岸ね。やっぱりちょっと温度差あるのは、やっぱり山陰とか、あっちの方はちょっとあれやけど、太平洋側の府県の市民は本当に。
- (五百旗頭) 南海大地震。
- (谷川) はい。
- (五百旗頭) そうですね。いやいや、それはぜひ広く社会全体と、後代の人たちのためにも頑張ってください。
- (谷川) それで、意外とその被災体験者の生の話が非常に役に立ったとおっしゃっていただけますね。うれしかったのは、目からうろこが落ちたとおっしゃってもらったこと。
- (五百旗頭) そうですね。一度、防衛大学にも来ていただいて、学生たちが発奮するよ

うにお話しいただきたいですね。

(谷川) いや、本当にもう。実は、昨日、三重県の熊野市に行ってたんです。で、住民の方と、それから行政担当者も来てましたけども、行政担当者はもう一回、この災害対応のマニュアルをもう一回考え直すとおっしゃってました。

(五百旗頭) そうですか。何かフィルムなんかを持っていらっしゃるんですか。

(谷川) 私、芦屋の記録ビデオを。

(五百旗頭) 記録ビデオ、何分ぐらいの。

(谷川) 30分。

(五百旗頭) そしてお話を。

(谷川) はい。それで、このビデオを30分すると私の話が時間短くなるんで、ビデオをとるところ早送りもするんですけどね。

(五百旗頭) なるほどね。

(谷川) 避難所の状況、もう、いっぱい避難所の状況、それから潰れた家屋の状況、それから人の動き。それでこれは芦屋の外郭団体のケーブルテレビ芦屋というのがありまして、そのカメラマンが震災直後から1週間ぐらいの間に、淡々と写した映像なんです。

(五百旗頭) ああ、そうですか。

(谷川) それだけに余計感動を与えるようですわ。

(五百旗頭) ああ、そうですか。ぜひ、あちこちで、防大も含めてお願いします。

(谷川) いえいえ、もう。

(五百旗頭) いや、本当にありがとうございました。

(谷川) はい、ありがとうございました。

(五百旗頭) 若い学生たちがね、よく頑張っているというね。市民一般とそういうのが大事ですよ。

(谷川) いや、学生は素晴らしいですわ。頭がやわらかいし。

＜参考文献＞

- ・ 五百旗頭 真「危機管理－行政の対応」朝日新聞大阪本社「阪神・淡路大震災誌」編集委員会編『阪神・淡路大震災誌』（朝日新聞社、1996年）
- ・ 塩崎賢明・室崎益輝・室崎／塩崎研究室「阪神・淡路大震災 犠牲者聞き語り調査」神戸大学＜震災研究会＞編『阪神大震災研究5 大震災を語り継ぐ』（神戸新聞総合出版センター、2002年）
- ・ 田中聡、林春男、重川希志依、浦田康幸、亀田弘行「災害エスノグラフィーの標準化作業手法の開発－インタビュー・ケースの編集・コード化・災害過程の同定－」『地域安全学会論文集』No.2、2000年11月
- ・ 御厨貴『オーラル・ヒストリー』（中央公論新社、2002年）

「オーラル・ヒストリーの記録に基づく災害時対応の教訓の活用化」研究体制

研究会会長	五百旗頭 真	研究調査本部長／防衛大学校長
研究会委員	林 春男	京都大学防災研究所 巨大災害研究センター教授
	重川 希志依	富士常葉大学大学院環境防災学科教授
	田中 聡	富士常葉大学大学院環境防災学科准教授
	室崎 益輝	関西学院大学総合政策学部教授
担当研究員	村上 友章	(財) ひょうご震災記念21世紀研究機構主任研究員

オーラルヒストリーの記録に基づく災害時対応の 教訓の活用化報告書

◆発行 (財) ひょうご震災記念21世紀研究機構 特別研究

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5番2号

T E L : 078-262-5570 F A X : 078-262-5593

<http://www.hemri21.jp/kenkyusyo/index.html>